モンスターハンター　～The return of tragedy～

金色の鸚鵡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンスターハンター　～Ｔｈｅ　ｒｅｔｕｒｎ　ｏｆ　ｔｒａｇｅｄｙ～

【Ｎコード】

Ｎ３２０８Ｆ

【作者名】

金色の鸚鵡

【あらすじ】

『モンスターハンタースサノオ』の続編ですが、ほとんど新作です。武器やモンスターは『モンスターハンターポータブル２ｎｄＧ』を題材にしています。脱線することもありますが、宜しくお願いいたします。

第一話【New wind】（前書き）

どうも（　）。金色の鸚鵡です。再びモンスターハンターのファンフィクションを書かせていただきます。この物語は前作、モンスターハンタースサノオの続編なので、初めて読む人にも分かりやすく書くつもりですが、前作を読んでくれた方がより分かりやすくなると思います。というわけで、これから宜しくお願いいたします。

第一話【New wind】

仙界・・・。

それは、この世とは別に存分する、人間やモンスターが立ち入ることすら許されない禁断の世界。

そしてその世界に住むのは、人を魅了する頭脳、モンスターを凌駕する力を持つ、全く別の種族。名を『仙龍』。この者たちが集結し、『仙龍族』が誕生した。

ここは仙界の中にある、巨大な城の一室。

“動かないな。振り子”

ある仙龍族の一員が言った。その者は黒い鱗に覆われていた。男の見つめる先には1メートルほどの大きさの、黒い振り子があった。否、この部屋には様々な色や大きさをした振り子がいくつもある。

“何か動いたか、月読(つくよみ)?”

部屋に新たな仙龍族の一員が入ってきた。全身が紅蓮色の鱗に覆われている。

“全然さ。スサノオがあほみたいに暴れたせいで、ここら一帯の振り子は停止したままだ。おい、天照(あまてらす)。最近、伊耶那岐(いざなぎ)様、おかしくないか?”

ツクヨミと呼ばれた仙龍が言った。アマテラスと呼ばれた仙龍は少

し考え、そして言った。

“確かにな・・・。我とお前とスサノオ。『三貴神(さんきしん)』と呼ばれた我らイザナギ様の重臣の一角のスサノオが下界に降りて戦争を起こし、人間やモンスターに多大な被害を与えた。そして戦争を止めるためにカミナホビが犠牲になった。更にイザナギ様の最愛の妻、伊耶那美(いざなみ)様も立て続けに亡くなられた。この仙界の管理で手一杯なのに、下界にも気を配らないといけないのだ。仕方ないことだ”

“それにしても我らに、下界の龍の言葉を話せるようにしろ、とは良くいったものだ。何の目的があるんだ？”

“我の考えでは、もしもまたスサノオのような輩が現れたら、直ぐ様対応できるように下界の言葉を知る必要がある、と思っての行動だろう。だが我が君、イザナギ様の命令ならば、我らはそれに従うまでだ。さあ、もう行くぞ、ツクヨミ。こんな辺鄙(へんぴ)な所にいつまでもいては我が君に叱られるぞ”

“そうだな。今が大変な時期だ。我らが支えなくては”

ツクヨミはアマテラスと共に部屋を出ようと歩いた。ツクヨミは、ふと右を見た。

“ん・・・？”

ツクヨミが突如、立ち止まった。

“なんだ、ツクヨミ？”

“今、あの振り子、動かなかったか？”

ツクヨミが指をさした。アマテラスはその方向を向いた。そこには、まるで血のように赤く毒々しい色をした振り子があった。

“今は動いていないぞ。それにこの振り子は下界の『惨劇の振り子』だ。スサノオが起こした戦争のせいで大きな惨劇が生まれ、それ以降ずっと動いていない。イザナギ様が下界に目を向けている以上、これが動くことはあり得ない。まあ、人間が惨劇を生むこともあっても、我らには関係ないことだ。気にするな”

“まあ、我の勘違いかな？早く出よう”

ツクヨミが言うとアマテラスは頷き、部屋を後にした・・・。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

そしてここは下界。

いつまでも続く大自然が広がる世界に、人間とモンスターは住み着いた。

強大な力を持つモンスターに対抗すべく、人間は独自の武器と防具を製造した。

いつしか、武器を持ち、防具を身に纏(まと)う者を、モンスターハンターと呼ぶようになった。
モンスターとモンスターハンターたちは、互いに死力を尽くして戦い、小競り合いが続く中、それぞれ住処(すみか)を見つけ、平和を手に入れた。それが永遠に続くと、誰もが思った。だが、平和は、いとも簡単に打ち砕かれた。自らを龍王と名乗る仙龍族の一員、素戔嗚(すさのお)が突如降臨し、大自然と街や村を異世界に送り、世界を起こした。当初は龍王側が有利になった。だが、人間側に救世主が現れた。

ラシュー・クルトイオン。
彼こそ世界を救った英雄である。
彼にはカナハル・ムーンズフト、ハルカ・マーシャ、ギィ・ソファラというパートナー、そしてドンドルマ最強の猟団『太陽の樹』所属の、レギンレイヴ、ローラン、アルマーズ、ハノン、ブルーニャ、アイク、バリガン、ジャファル、ラーチェルの助力もあり、見事スサノオを倒すことに成功し、元の世界に戻った。

それから三年後・・・。

物語は、戦争の傷がほとんど癒えたドンドルマに程近い密林のほぼ中心に位置する、洞窟の中から始まる。

「この辺りのランポスはだいたい片付けたな。あとは、親玉だけか」

そこには一人の少年がいた。全身を青い防具、ランポスシリーズを身に纏い、刀身が白い太刀、『鉄刀【神楽】』を振るい、辺りにはランポスの死骸がたくさんあった。

グワアア、グワアア！！

「噂をすれば・・・！」

少年が洞窟の入り口を見ると、ランポスよりも大きな体、そして大きな鶏冠（とさか）が特徴的なモンスターが現れた。これこそ、ランポスの親玉、ドスランポスだ。その周りには、四体のランポスが付き従っていた。

「まずは、っと！！！」

少年は突如ドスランポスに背を向け、ポーチから黄色い玉を取りだし、前方に勢い良く投げた。

その間にも、ドスランポスは先陣をきって駆け出し、少年に近づく。その距離が縮まり、ドスランポスは噛みつこうとした、その時。

グワアア？

突如、辺りに閃光が迸（ほとばし）った。ドスランポスや後方からゆっくり迫って来ていたランポスが強烈な光りに目を眩ませ、悶えていた。

少年が投げたのは閃光玉という、破裂すると強烈な閃光を発する手投げ玉だ。ハンターなら誰もが重宝する、必需品と言っても良いくらいの便利な道具だ。

「一応シビレ罠を仕掛けるか」

少年は一言発すると、少し離れ、急いで地面に罠を仕掛けた。少年はそれを発動させると、円盤状に黄色い電撃が走った。シビレ罠特有の、モンスターの動きを封じる電撃だ。少年はドスランポスたちを見た。まだ閃光玉の効果が続いているのか、未だに悶えていた。

「周りのランポスから片付けるか」

少年は駆け出した。そして一頭のランポスに勢い良く抜刀しながら斬った。数回攻撃を加えると、ランポスは力無く倒れ、動かなくなった。

少年は続けて側にいたもう一頭のランポスにも斬りかかり、同様に倒した。

グワアア、グワアア！！

ランポスとは違う力強い鳴き声が響く。少年が振り返ると、目をぱっちりと開けてこちらを睨むドスランポスがいた。視界が回復し、部下が殺されたことに怒りを剥き出しにし、少年に飛びかかる。

「あぶね！！！」

少年は前転して攻撃を避けると、太刀を納刀すると、再びポーチから閃光玉を取りだした。刹那。

グワアア！！

「おわっ！！」

残り二体となったランポスの内の一体が少年に飛びかかった。衝撃で少年の体は宙を舞い、吹き飛ばされ、地面に打ち付けられる。

「しまった！閃光玉が！」

さっきの攻撃で閃光玉を手から離してしまい、発動しなかったようだ。

グワアア！！

ドスランポスは鳴くと、ゆっくりと少年に近づく。少年は急いで立ち上がろうとする。すると。

グワアアウ！！

グワアア！

「何！！」

二体のランポスが少年の腕に噛みつき、体重をかけて少年を押さえこむ。

さすが、リーダーであるドスランポスがいると、ランポスも単純な行動だけでなく、頭脳的な行動もするようだ。少年は防具に覆われているため、噛まれている両腕は大丈夫だが、全く動けない。もがいている間にも、ドスランポスは近づいて来る。

「こんなところで、俺は・・・」

少年は死を覚悟した。

グワアアアア？

突然、悲鳴ともとれる声がした。少年はドスランポスを見た。

体が痙攣している。ドスランポスのいる地面には黄色い電撃が走っている。

少年を押さえつけているランポスたちは呆然とリーダーを見つめている。少年はこのチャンスを逃さなかった。

「うおおおお！！！」

少年は渾身の力を込め、腕を持ち上げ、自らの体を軸にし、思い切り回転した。力が緩んでいたランポスたちは口を離し、吹き飛ばされた。

「くらえええ！！！」

少年はお返しとばかりに二体に斬りかかり、絶命させた。

「ほ、本気で死ぬかと思った・・・。もう怒ったぜ！！」

少年はシビレ罠に悶えるドスランポスを睨んだ。

「ふううう・・・」

少年は目を閉じ、大きく息を吐いた。そして言った。

「コンセントレイション・モード。・・・入った」

やがて、ドスランポスはシビレ罠の呪縛を解き、少年を見た。その瞬間ドスランポスは、こう思っただろう。

この男、やばい、と・・・

今の少年は先ほどまでの少年とは違う。纏う空気が変わった。放たれる殺気、闘士に燃える二つの瞳。どれもが尋常じゃない。ドスランポスは本能的に後退りした。

「はああ！！！」

少年は跳躍した。そして一瞬のうちにドスランポスの体を斬りつけた。

グワアアウ！！！

ドスランポスが悲鳴をあげている間も、波状攻撃は続いていた。ドスランポスは鋭い爪で攻撃を加えようとした。だが、少年は一瞬で背後に回り、斬りつける。

今の光景を見たら、誰しもが驚くだろう。それほどまでに、一方的な戦いだった。

ドスランポスの攻撃を最小限の動きで避け、怒涛の連続攻撃を放つ少年。そのような光景が数分続いた。

ついに戦意を失ったドスランポスは跳躍し、少年から離れると、洞窟から出ようと駆け出す。

「逃がすか！！」

少年は咄嗟に支給専用アイテムの、投げナイフを投擲した。

グサッ！！！

鈍い音をたて、ナイフはドスランポスの後ろ右足に突き刺さった。

グワアア！！！

ドスランポスは支える足にダメージを負い、倒れた。もがくドスランポスに、少年は近づき、

「終わりだ！！！」

と叫ぶと、太刀を降り下ろした。その軌道にあったドスランポスの首は切断され、大量の血が噴き出す。勝敗は決した。

少年は言葉も発することなく、黙々とドスランポスの体をナイフで剥ぎ取り始めた。

しばらくして剥ぎ取り終わると、少年は目を閉じ、大きく息を吐いた。再び目を開けると、さっきまでの鬼神のような少年はいなかった。

「これ使うと、しばらく休まないといけないからな・・・」

少年は肩で息をしながら、その場に座った。

「はは、また師匠に怒られるな。言い訳考えないと」

少年は呟いた。

そして数時間後、ベースキャンプには迎えの船が来ていた。そこに向かう一人の少年がいた。

「その様子じゃと、依頼は成功したようじゃな」

船を動かす竜人族の老人が言った。

「へっ、当たり前さ。この、リオン・ウィルシャー。向かうところ敵無し、ってね」

少年はにこやかに言うと、船に乗った。

そう。この少年こそ、再び始まる物語の主人公、リオン・ウィルシャーである。彼の進む道は、惨劇と怒り、そして悲しみに満ちた茨の道。それを知るのは運命を統べる神のみ。当然、今の彼には知る術(すべ)は無い・・・

第二話【師匠と弟子】

ドンドルマ・・・。

シュレイド地方にある、大陸の中央に位置する、大陸最大の街。古来より古龍や巨大な甲殻種などのモンスターの襲撃を受け続けている。しかしその度に、瞬く間に復興する活気と強靭さに満ちている。この街を拠点にするハンターは軽く百を超え、新米ハンターから熟練ハンターまで、様々だ。

そんな活気ある街、ドンドルマに三年前、惨劇が起きた。スサノオ率いる多くのモンスターの襲撃、そして全ての龍の頂点に立つ、神と呼ばれし龍、ミラルーツの飛来。その時の戦いはラシューやドンドルマ最強の猟団『太陽の樹』のメンバーの活躍もあり、なんとか勝利することが出来た。

だが、その痛手は、あまりにも大きかった。破壊された建物、多くのハンターの死。

現在、ドンドルマの街は新たな建物が建設され、以前と、ほぼ元通りになった。そして人々は悲しみを背負いながらも元気を取り戻し、活気が戻り始めた。

ここはハンターたちが依頼を受けとる、集会所。

カウンター内の受け付けの女性に依頼書を見せてもらい、受注するハンター。近くにある酒場で酒などを飲み、ばか騒ぎするハンター。様々なハンターが入り交じる、活気に満ちた集会所。今、カウンターに一人の男が来た。

「ジェニファーさん。依頼、こなしたよ」

「あら、リオン君。相変わらず元気ですね」

その男、リオンは受け付けの女性に声をかくた。どうやらこの女性はジェニファーと言うようだ。

「こちらにも報告が来ています。しばらくお待ち下さい。報酬金と素材を用意しますので」

その女性はリオンに言うと、集会所の奥へと行った。リオンは一人待っていると。

「邪魔だ、どけよ新米ハンター」

見るからに悪そうなハンターがリオンに突っ掛かった。おそらく酒に酔っ払っているのだろう。

「邪魔はそっちだろ、糞じじい」

「んだと！！てめえみたいな新米はすっこんでろ！！ここでは弱いハンターは力あるハンターには絶対服従だ！！だから、そんなランポス装備のガキは、俺みてえに強い奴に絶対服従なんだよ！！見ろよ、このリオレウスシリーズをよ！わかったらさっさとどけ！！」

確かにリオンのランポスシリーズに比べたら、そのハンターのリオレウスシリーズの足元にも及ばないだろう。

力がものを言うハンターの世界では、依頼人は突然弱いハンターより強いハンターに依頼したいと思う。よってこのハンターのように

力があるハンターが偉い、という思考を持つハンターも多い。そのことは新米ハンターでもわかっている。だがいかんせんプライドが高いリオンは売られた喧嘩は買うとばかりに言い放った。

「はっ！！見たところその防具は下位クラスのリオレウスシリーズじゃないか。おっさんほどの年でその防具じゃ、実力もたかが知れてるね」

「このガキが！！この俺様が制裁を加えてやる！！！」

その男は拳を振り上げた、その時。

「ガキ、か・・・」

突如現れたハンターがその男の肩に手をかけた。

「誰だ！！」

その振り返る。そしてその男を見た。

褐色の防具に身を包み、どす黒いランスを装備し、きれいな青色の髪の青年が立っていた。

「げっ！！カナハル・ムーンズフト！！なんでここに！？」

「師匠！！」

喧嘩を売ったハンターが仰天し、またリオンも驚いた。

その男の名はカナハル・ムーンズフト。三年前の戦争で世界の英雄

と称されたラシュー・クルトイオンの親友であり、自身も類いまれなランスの腕前を持つ、ハンターなら誰しもが知っている者。

「悪いが、俺から見ればお前もガキに見れるぞ。つまらない喧嘩はやめろ。お前言ったよな。弱いハンターは強いハンターに絶対服従だって」

「あんたに逆らう気は無いっての！あばよ」

そのハンターは言い捨てると、その場から離れ、掲示板に貼られた依頼を見に行った。

「さっすが師匠だ！良い気味だぜ、あのおっさん」

「リオン。今のはお前にも責任がある。安い挑発に乗りやがって。戦場でそんなことしたらどうなるか分かっているのか？」

「大丈夫ですって！俺もそこまで馬鹿じゃありませんから」

「リオン君。お待たせしました。あら、カナハル様も一緒でしたか」

戻ってきたジェニファーは言うとリオンに報酬金と素材を渡した。これで無事、依頼は達成されたことになる。

「リオン。お前またコンセントレイション・モード使ったんじゃないだろうな？」

カナハルがリオンに尋ねた。

「ま、まあ、使ったは使ったけど・・・」

「はあ・・・あれほど使うなと言ったのに・・・。もう一度説教が必要だな」

「仕方なかったんだよ!!今回マジで危なかったんだから!!一瞬天国見えたから!!」

リオンが反論したが、カナハルにとっては単なる言い訳にしか聞こえなかった。

「まあいい、行くぞ。とにかく体を休めろ」

「・・・はーい」

リオンはしぶしぶカナハルについていった。

(ふふっ。今夜は長い説教になりそうね)

二人を見送ったジェニファーがくすくす笑いながら思った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

その日の夜。

「はあ～・・・」

ドンドルマにある集会所の近くにある広場で、リオンはうつむいて

いた。結局、リオンはカナハルに長い説教を受けたようだ。

「別にいいじゃねえかよ。コンセントレイション・モードは俺にしかない力なんだから・・・」

「あら、リオン君。どうしたの？」

リオンが声に反応して振り返ると、ジェニファーが立っていた。仕事終わりなのか、衣装は集会所にいた時と変わらない。

「その様子だと、カナハル様に説教されたようですね」

「まあね。別にあんなに説教しなくていいのによお」

「仕方ありませんよ。そのコンセントレイション・モードは強力ですけど、一度解除すると、もはや戦える状態じゃなくなる、って聞きますから。まだモンスターが生きていたら危険だからね」

「そんなの俺でも分かっているよ。だから完全に仕留めたら解除する、って散々言ってるのに、全く聞かないんだから。はあ～。師匠は俺なんかどうでもいいんだ～」

リオンは言うと地面に座り、うつむいた。

「そんなことありませんよ。カナハル様はリオン君に期待しているんですよ」

「俺に？」

「はい。じゃあ、ちょっと昔話しましょうか」

ジェニファーはリオンの隣に座った。

「二年前、この街に一人のハンターがギルドに登録された。驚くべきことに、そのハンターは半年前までの記憶を失っていた」

「ああ。気づいた時にはドンドルマの街に立っていた。この世にいきなり生を受けたんだ」

「そのハンターは集会所にいた私に話しかけた。ここはどこだ？僕は誰だ？ってね」

「あの時は感謝してるよ。何も知らない俺に一から教えてくれたからね。俺の名前もジェニファーさんがつけてくれたんだ」

「そうね。リオン君は半年かけて日常生活に支障が出なくなった」

「その時、ジェニファーさんが、訓練所に入ってハンターにならないか、って言ったんだ」

「この世界で生計たてるにはハンターが一番手っ取り早いからね。でもリオン君には天賦の才能があった。それがコンセントレイション・モードね」

「まあ、あの頃は楽しかったな。ただ純粋にモンスターを狩ることが出来たし、皆褒めてくれたから」

「そして今から一年前。訓練所にカナハル様が現れた。訓練生は皆実力を見せようと張り切っていたけど、リオン君だけはいつものようにコンセントレイション・モードを発動させて冷静にモンスター

を狩った」

「その日の夜は、俺の人生の転機だった。師匠に、俺の弟子にならないか？、って言ってくれた。まあ、その後コンセントレイション・モード使うたびに説教されるけどな」

リオンは苦笑した。ジェニファーはくすくす笑いながら言った。

「でもそれがカナハル様の優しさだと思いますよ。リオン君には昔の記憶が無いことも全く気にしてませんでしたし。指導者としても凄く優秀ですから、何か考えがあるんでしょう」

「優しさねえ・・・。早く師匠に俺の実力を見せる機会が来ないかなあ・・・。さあ、もう寝よっかな。お休みなさい、ジェニファーさん」

「お休みなさい、リオン君」

二人はわかれると、それぞれの家に向かった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

二日後、集会所。

「イャンクックの狩猟？」

リオンはカナハルからの言葉を聞き、おうむ返しに言った。

「ああ。この街から一日の距離にある『サティアー密林』で大怪鳥イャンクックが発見された。この密林はお前も何度か行っていることだし、このイャンクックも下位モンスターと認定されたから、お前にぴったりのモンスターだと思うが？」

大怪鳥イャンクック。全身が桃色の鱗に覆われ、大きな耳とくちばしが特徴的なイャンクックは、飛竜の中でも圧倒的に生息数が多い。飛竜の割りに小柄で、逃げ足が速いので、そんなに強くはない。そのため、イャンクックを倒せれば初心者ではなくなる、とハンター内で言われている。

「やっと飛竜を討伐出来るんだ！もちろん受けるよ！」

リオンは興奮しながら言った。

「じゃあ直ぐに準備だ。正午の船で出発しろ。今回の相手は飛竜だ。用心しろよ」

「分かってるよ。さあて、準備するか！」

リオンは意気揚々と集会所を出ていった。

（そろそろ一人ではきつくなる頃だ。帰って来たらパーティーを組むよう言っておこうかな）

カナハルは今後のことを思った。

だが、翌日の正午、事態は一変する。

カナハルはいつものように集会所に来た。

「か、カナハル様、大変です！！」

「ジェニファーさん？どうしたんです？」

ひどく焦っているジェニファーにカナハルは落ち着かせながら言った。

「リオン君が行った『サティアー密林』に、リオレイアの目撃情報が入りました！！」

「なに！！」

カナハルは仰天した。それもそのはず、リオレイアは『空の王者』と呼ばれるリオレウスの対となす、『大地の女王』と呼ばれる非常に強力な飛竜だ。まずリオンでは勝てない。

「『サティアー密林』の近くにハンターはいるのですか！？」

「そ、それが・・・あの辺りはあまり資源に恵まれていなくて、人もモンスターも、そんなに来ない場所なのです。期待は出来ません」

ジェニファーが説明した。確かにあの辺りはドンドルマに近いほうだが行商人がよく利用する密林の正規ルートが他に存在するため、サティアー密林は忘れられた存在なのだ。

今回のイャンクックの狩猟はカナハル自身が穴場だと思ってリオンに行かせたが、それが仇になったようだ。

「俺が直ぐに行く！手続きを頼みます、ジェニファーさん！！あい

つのことだ、興味を持って戦いを挑むかもしれん！！」

「は、はい！！」

カナハルは集会所を出ると急いで家に戻ろうと走った。

（リオン、無事でいてくれ！！）

カナハルはただ、リオンの生存を願った・・・。

第三話【サティアー密林の大怪鳥】（前書き）

サティアー密林は、ゲームで言えばエリア１０がない密林です。なお、戦いは短いです。今回、書いていると、改めて戦いの描写は難しいと感じました。リオン一人だと間がもたない・・・。精進します！。

第三話【サティアー密林の大怪鳥】

サティアー密林。

南北西の三方を湖に囲まれ、中央部には広大な洞窟が広がる、温暖で過ごしやすい気候の土地。

この密林のベースキャンプに降り立ったリオンは支給品を確認し、応急薬や携帯食料などを手にし、持ち物を整理した。

「回復薬、砥石、食料。ペイントボールに閃光玉に音爆弾にシビレ罠。まあ、全部使うことないと思うけど」

リオンはアイテムをポーチにいれ、まずは密林地帯を目指した。

しばらく進むと、草食のモンスター、アプトノスに出会った。しかし数は多くはない。一説には、このサティアー密林は何らかの理由で地上からアプトノスのようなモンスターが密林に入らないため、それを食する飛竜種も入らない、と言われている。

「本当にここはモンスターがいないな・・・。こりゃ簡単にイャンクック見つけられるぞ！」

リオンは言うと走り出した。だがしばらく進むと。

グワアア、グワアア！！

突然後方から鳴き声が聞こえた。リオンが振り返ると、ランポスが三体、リオンを睨んでいた。

「まあ、世の中そんなに甘くはないか。はいはい、分かってますよ、そんくらい」

リオンは苦笑すると、太刀、鉄刀【神楽】を抜刀した。

グワアア！！

一体のランポスが高く跳躍し、リオンに飛び掛かった。

リオンは冷静に避けると、踏み込みながら縦斬りを行った。

ブシャアア！！

と、ランポスの体を真っ二つにし、大量の血液を撒き散らしながらランポスは絶命した。その光景を見ていた他のランポスは仲間の突然の死を見て、立ちすくんでいた。

「甘いぜ！！」

リオンは一気にランポスに近づくと、素早く太刀を突いた。

痛みに悶えるランポスに、リオンは太刀を掬い上げるように斬り上げると、ランポスは吹き飛び、断末魔を上げながら絶命した。

残り一体となったランポスは仲間の無念をはらすとばかりに、リオンに飛び掛かった。

リオンは前転して避けると、素早く立ち上がり、自らの体を軸にし、回転しながらランポスに斬りつけた。

リオンの力を遠心力が加わり、ランポスの体は真っ二つにされ、絶命した。

リオンは一息つくと納刀し、北の方にある湖を目指した。

そして生い茂る巨木がない、草原地帯に来た、その時。

「ん！？」

リオンは反射的に屈んだ。

空から何かの滑空音が聞こえる。

見上げると、桃色の翼を持つ物体が空中で停止し、この近くに着地しようとしていた。

リオンは近くにあった岩陰に隠れた。しばらくして、桃色の物体、否、竜が着地した。

桃色の鱗に、りっぱな顎と大きな耳が特徴的な、鳥にも似た竜。『大怪鳥』の異名を持つ鳥竜種、イャンクック。今回、リオンが狩猟する相手だ。イャンクックは辺りを見渡すと、警戒心を解き、草を食べ始めた。

（あれが大怪鳥、イャンクック。ドスランポスとは比較にならない力を持ってそうだな。はは、体が震えてやがるぜ）

だがその震えは恐怖の震えではなく、強き者と戦える喜びに体が無意識に反応する、いわゆる武者震いと言うやつだ。そのことはリオ

ン自身も分かっていた。

（さあて、飛竜最弱と言われるイャンクックは、果たしてどれほど強いのか、確かめるか）

リオンは岩陰から勢いよく飛び出すと、イャンクックに迫った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

リオンに気がついたイャンクックは、体を仰け反り翼を広げ、威嚇した。だがリオンはお構い無しにイャンクックの頭部に抜刀斬りした。

クワアア！？

突然の攻撃に動揺したイャンクックだったが、この攻撃でリオンを敵と判断したようだ。

クワアアアア！！！

イャンクックはリオンに向かって自慢の大きなくちばしでついばみ攻撃をした。

「よっと！！」

しかしリオンは事前に前転してイャンクックの後方に回避していたので、ついばみ攻撃は空を切った。

「おりゃあ！」

リオンは素早く立ち上がると、イャンクックの尻尾に斬りかかった。リオンの太刀がイャンクックの尻尾にきれいな傷をつけ、そこから剥がれた鱗と共に鮮血が舞う。

クエェェ！！

痛みにイャンクックは悲鳴にも似た声をあげる。イャンクックは直ぐさま方向転換し、リオンを睨むと口に赤い液体を溜め始めた。

「やばっ！！」

リオンは咄嗟に後ろに跳んだ。刹那、イャンクックの口から、ドパッ、と赤い液体を吐き出した。

バアアアアン！！！

その液体はリオンの足元の地面に当たると、轟音と共に火柱が上がった。

「あちっ！！これがイャンクックのブレスか！！」

リオンは言ったが、この攻撃は厳密に言うと通常のブレスとは違っている。

一般的なブレスとは、リオレウスの火球を代表とする飛竜種が口から吐き出す特殊攻撃を指す。そのどれもが長い攻撃範囲をほこり、ハンターを苦しめる要因になる。だがイャンクックなどの鳥竜種のブレスは違う。彼らは一回のブレスの材料となる液体を過剰に生産

してしまう。結果、重くなった液体をまとめて吐き出すと、重力に逆らうことが出来ず、2～3メートルくらいしか飛距離がない。

だが、その攻撃はある意味飛竜種のブレスより厄介な所がある。

飛竜種のブレスは瞬間的にダメージを与えるため、リオレウスの火球でいうなら、当たった瞬間に全ての火球の物質が爆発し、その後、火球の物質は全て消える。

これに対して鳥竜種、イャンクックのブレスは、その液体には粘着性があり、ハンターの防具に直撃すると、爆発しきれなかった物質が防具の隙間に侵入し、高温の液体がハンターの細胞を防具の内側から焼き殺すのだ。

火耐性のない防具ではひとたまりもない。幸い、リオンの装備するランポスシリーズには僅かながら火耐性があるが、足元で爆発したイャンクックのブレスの高温にはリオンも恐怖する。

（あんなの喰らったら、やばいな・・・）

リオンは恐怖を払拭し、ブレス後に隙ができていたイャンクックの翼に斬りかかった。

クエェェェェ！！

イャンクックの悲鳴がより一層大きくなった。

（翼のほうが良く斬れる。こいつの弱点は翼か！！）

リオンが気づいた時、イャンクックはリオンに向かってついばみ攻

撃をした。

「ぐっ！！」

攻撃がリオンを襲い、イャンクックのくちばしがリオンの防具に直撃し、衝撃でリオンの体はイャンクックの体から数メートルも飛ばされた。

「くそっ、こうなったら！」

リオンは直ぐさま立ち上がると、ポーチから音爆弾を取りだし、イャンクックに向かって投げつけた。

キィィィィィン！！

と、戦場に高温に鳴り響く。

クエェェェェ・・・

イャンクックは体を仰け反ると、そのまま硬直した。

イャンクックの特徴的な大きな耳は、聴力を優れさせている。だが同時に、爆音を響かせると悶絶し、しばらく行動を制限させる致命的な弱点を生み出した。

「おらおらお～！！」

リオンは悶絶しているイャンクックに波状攻撃を仕掛け、斬って斬って斬りまくる。やがて太刀特有の錬気ゲージが溜まり、太刀に赤い気が纏(まと)い、威力の高い攻撃をあたえた。

クワアアアア！！

だが音爆弾の呪縛から解放されたイャンクックは口から赤い液体が漏れ、小規模の爆発を起こしながら飛び跳ねた。

「キレたか！！」

リオンは言った。正確には興奮状態と言うのが、今のイャンクックだ。

これからの戦いにおいて、興奮状態は最も危険な状態だ、と全てのハンターは嫌でも学ぶ。それほどまでに、この興奮状態は危険なのだ。

興奮状態のイャンクックは翼を大きく広げながらリオンに突進した。

「うぐっ！！」

イャンクックの目の前にいたリオンは避けることが出来ず、大きく吹き飛ばされた。

「がはっ！！何て威力だ！！」

リオンは苦しみながら立ち上がる。だがその時にはイャンクックは再びリオンに向かって突進していた。

「速い！！」

リオンはすぐに回避行動をしたが、間に合わず再び吹き飛ばされた。

（このままじゃ、ヤバい！！）

リオンは地面に倒れたまま、強引にポーチから閃光玉を取りだし、上空に投げ、自身は目を閉じた。

クワアアアア！！

イャンクックの鳴き声が響いた、その時、辺りに閃光が走った。

クワアア！？

リオンが見ると、イャンクックが目をつむり、悶えていた。

「助かった・・・」

リオンは立ち上がると、急いで応急薬を飲み終えると、太刀を砥石で研ぎ、イャンクックに近づき、ペイントボールをイャンクックに投げつけた。ベチャ、と音がし、分かりやすい色が付着した。

「さっきは良くもやってくれたな！」

リオンは目を閉じ、意識を集中した。が・・・。

「だ、駄目だ！！コンセントレイション・モードを使っちゃ！！もう師匠を落胆させたくない！！」

完璧な戦いの勝利より、師匠への思いが勝った。こいつにはコンセントレイション・モードを使わないで勝つ。リオンは決心した。

クワアアアア！！

閃光玉の効果が消えたイャンクックが鳴き声をあげ、狂ったかのように連続して火炎液を吐き出した。瞬時に離れたリオンには当たらなかった。

「もうキレてないな。だったら！」

リオンはポーチから音爆弾を取りだし、イャンクックに投げつけた。

キィィィィィン！！

と高音が響き、イャンクックは再び仰け反った。

「うおおお！！！」

リオンは力を振り絞り、連続攻撃を与える。そして血だらけになったイャンクックが意識を戻すと、耳を折りたたみながら、飛び跳ねた。

（弱ってるのか！）

リオンは急いでイャンクックの向いてる方に閃光玉を投げつけた。

クワアア！？

イャンクックは目を閉じ、悶える。

「これで決める！！」

リオンは再び波状攻撃を仕掛ける。イャンクックは回転しながら尻尾を振り回すが、リオンは直ぐに回避する。

再び目を開いたイャンクックは、足を引き摺りながらその場を離れようとする。

「逃がすか！！」

リオンはイャンクックの右翼に渾身の力を込めて斬りかかった。

ブシャアア！！

と、血が噴き出す。

クワアア・・・

それが致命傷だった。イャンクックは力無く倒れ、断末魔をあげ、絶命した。

「はあ、はあ・・・。やった・・・」

リオンは初めての竜との戦いの勝利を、静かに噛み締めた。リオンは呼吸を落ち着かせると、剥ぎ取り用のナイフでイャンクックの体を解体し始めた。

命を散らしたモンスターの素材は、ハンターが有効活用し、残った体は土に帰る。それが生きるハンターに与えられた運命。モンスターを殺すという重い業を背負う者、それがモンスターハンター。

「さあ、帰るか」

リオンが解体を終え、ベースキャンプに向かおうとした、その時。

グオオオオオウ！！

轟音と共に、何かが飛翔する滑空音が聞こえた。

「なんだ！？この方向は北の湖からだ！！」

リオンは鳴き声の正体を知るべく、北の湖に向かった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

グルウウウ・・・

唸り声をあげる巨大な竜が北の湖近くの砂浜が広がる大地に現れた。

全身が緑色の鱗や甲殻に覆われ、長く尻尾をもつ竜だ。

「あれは・・・『雌火竜』リオレイア」

その飛竜を遠くの巨木の隙間から見るリオンは呟いた。

『雌火竜』リオレイア。飛竜種の中でもトップクラスの強さを誇る竜。リオレイアはリオンには気付いていないのか、周りを見渡したり、ただ後ろ足を使ってゆっくり歩くばかりだった。

「すっげえ・・・あれが飛竜か。イャンクックなんか目じゃねぇな」

リオンはリオレイアの行動を一挙一足全て見ていた。

飛竜のオーラと言うべきか、リオンは巨木の影から動こうとしない。あと少し、あと少しだけ・・・。次々とリオレイアを観察したいという欲望にリオンは逆らえなかった。

だがその行動は、ハンターとして、やってはいけないことだ。不運は突然やってくる。

「いたっ！！」

突然リオンの背中に衝撃が走った。振り返ると、全長1メートルほどの蟹のような姿をしたモンスターがいた。

「げっ、ヤオザミ！」

リオンはいつの間にかヤオザミに狙われていたようだ。ヤオザミは普段地中に潜っているため、発見が遅くなれば不意打ちをくらう。執拗にハンターを狙うヤオザミは、とても厄介なのだ。

だが今、状況は最悪だった。

グルウウウ？

リオレイアがはっきりと、リオンの姿を見た。さっきの不意打ちで巨木から出てしまっていた。

「やばっ、早く逃げないと！」

リオンは後退りした、その時。

グワアアアアア！！！

リオレイアが口から轟音を発した。

「うわあああああ！！！」

モンスターが発する、耳をつんざく雄叫び、咆哮。それと同時に発せられるのは、純粋なる殺意。リオンは耳を両手で塞いだが、それでも鼓膜を激しく刺激する轟音と、リオレイアから放たれる殺意に恐怖し、動けなくなっていた。

リオレイアは咆哮を終えると、口に火炎を集め、球体を作っていた。

（動け、俺の足！！）

リオンは必死に動かそうとしたが、体は反応しない。恐怖心により、脳から放たれる命令を全身を司る神経が拒絶しているのだ。

リオレイアの口から漏れる火炎。そして口を振りかざし、そして。

ガアアアウ！！！！

リオレイアの口から火球がリオンに向かって放たれた。重力を無視し、水平飛行する火球がリオンに迫る。

リオンは動けなかった。彼から見て、その火球は、死を与える死神のように見え、呆然としていた。

バアアアアン！！！

火球はリオンの腹部に直撃し、爆発した。

「ぐあ・・・」

鈍い一言をあげ、リオンの体は１０数メートル吹き飛ばされ、転がりながら着地した。

「うあ・・・」

リオンは顔だけ持ち上げる。

胴部分を覆うランポスメイルは粉砕され、あらわになった腹部から多量の血が出ている。

（痛え・・・こりゃ、あばらが何本か、折れたな）

倒れるリオンに迫るリオレイア。強者は弱者にひれ伏す。自然の摂理を感じたリオンは、静かに目を閉じた。

（ここで死ぬのか・・・。まあ、仕方ないか）

リオレイアの足音が、リオンの脳内で繰り返し響く。暗闇がリオンを支配した。

その時、光が迸(ほとばし)った。

瞼を閉じても分かるほどの閃光。

（何だ・・・？）

リオンは、そっと目を開いた。

前方には、悶えるリオレイア。目を閉じ、暴れていることから、閃光玉の効果だとリオンは分かった。

「大丈夫か？とりあえず、お前をベースキャンプに運ぶ。それまで、死ぬなよ」

突如現れた男は、リオンの体を両手で抱えると、持ち上げ、その場を後にした。

リオンが知っているのはここまで。彼は、ゆっくりと目を閉じ、気を失った・・・。

第三話【サティアー密林の大怪鳥】（後書き）

今回、イャンクックと戦った場所はエリア2、リオレイアに遭遇したのはエリア3です。次回、カナハルとは別の、前作の登場人物が現れます。更新は遅いですが、宜しくお願いいたします。

第四話【Ｔｈｅ　ｈｅｒｏ】

開けようと思っても、開かない瞼。続く暗闇・・・。だが、それは永久（とわ）に続かなかった。突如、リオンの瞳は景色を写した。

（なんだ・・・これは・・・？）

視界が捉えたのは、薄緑色の液体に包まれている自分。更には自然と呼吸が出来ている自分。この世とは思えない光景に、リオンは困惑したが、直ぐに理解した。自分は、夢を見ていると・・・。

リオンは、そっと手を伸ばす。すると、固く透明な物体に当たった。

（俺・・・閉じこめられてる・・・？）

左右を横目で見ると、同じようになっていた。カプセル状の透明な壁に囲まれいる。ふと前を見ると、視界が霞む先に、動く物体を見つけた。

（あれ・・・？あの人、どこかで・・・）

リオンが思った時、瞼が重くなり、視界が再び閉ざされた。暗闇の再来に、リオンは驚き、もがいた。瞼を無理に開けようとし、そして・・・。

「はっ・・・！！」

急に瞼が軽くなり、その反動で目を見開いた。広がるのは空を彩る星たち。どうやら、仰向けに寝ていたようだ。

「やっぱ夢か・・・」

さっきまで見ていた光景の余韻がリオンの思考を鈍らす。リオンはしばらくして、体を起こそうとする。

「いっつ!!!」

突然、リオンは激痛に襲われた。腹部を貫く痛みにリオンは腹に手を置いた。

「まだ動くなよ。あばらが数本折れてるからな」

リオンは声のした方向に目を向けた。

黒いロングコートを身にまとい、中に黒いTシャツを着て、それをサスペンダーでクロスさせた、茶色の髪の男が、かがり火をつけていた。

「あんた、誰だ?」

リオンは恐る恐る尋ねた。

「はは、それが命の恩人に言う尋ね方かよ。まあいいけど。俺は名乗るほどでもない、普通のハンターさ」

「ふうん。普通のハンターねえ・・・」

リオンは顔だけその男に向けたまま話した。

「その防具でリオレイアに挑んだのか？大した度胸だな」
「違うよ。ただ見てるだけだった。戦いなんて挑むかよ。まさかヤオザミに奇襲されるとは思わんかったけど」
「フィールドでは何が起こるか分からんからな。お前のやったことは自殺行為だ。二度とすんなよ」
「分かってるよ。ランポスメイルが使い物にならなくなったんだから。はあ～。師匠にまた怒られるなあ～」
リオンは深くため息を吐いた。
「お前がそんなやつだと、その師匠もたかがしれてるな」
「何を～！俺の師匠はな！かつて世界を救った凄腕ハンター、カナハル・ムーンズフトだぜ！！」
「カナハル？」
「へっへ～ん。驚いたか？」
その男の反応に、リオンはうっすら笑った。
「そうか。お前、カナハルの弟子か」
「師匠を呼び捨てにする奴なんて初めてだぞ」
「ああ、悪い。懐かしくてな。カナハルの弟子のお前には、ちゃんと名乗らないとな」

男の予想外の言葉に、リオンは疑問を抱いた。

「俺の名前は、ラシュー・クルトイオンだ」

「ラシュー・クルトイオン・・・って、まさか！！！」

リオンは仰天して体が起き上がるが、直ぐ様激痛に襲われ、再び体は横になった。

「もしかして、あんた、師匠の親友で、世界を救った英雄、ラシュー・クルトイオンか！？」

「英雄かどうか知らんが、俺の名前はラシューだ」

「まじかよ・・・。あんた、こんなところで何してんだよ？」

「まあ、いろいろとな」

その男、ラシュー・クルトイオンは答えた。三年前の大戦で龍王スサノオを倒した張本人であり、また、世界の英雄と讃えられた男、ラシューがリオンの目の前に立っている。リオンはそれだけで興奮した。

「そういえば、お前の名前、聞いてなかったな。名はなんだ？」

「俺か？俺はリオン・ウィルシャーだ。まあ、なんにせよ、助けてくれてありがとな」

リオンは仰向けになったまま、右手を差し出した。ラシューは黙っ

たまま、その手を握った。

「おや？船が来ているな。たぶん十分くらいで到着するな」

「何でそんなこと分かるんだ？」

「今、『鷹見のピアス』を着けているんだ。これを着けると、鋭敏な探知能力が身に付くんだ。まあいわゆる自動マーキングが発動してる、ってことだ」

「ふぅ～ん」

しばらくリオンとラシューは会話を続けた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

約十分後・・・。

「リオン！！無事か！？」

船がベースキャンプに到着し、出てきたカナハルが、横たわっているリオンを見つけ、叫んだ。

「まあ、何とかね。リオレイアに殺されかけたけど」

「俺がいなかったら完璧に死んでいたな」

カナハルが近くにいた黒服の男を見つけた。

「ラシュー！？本当に、お前か！？」

「本人だよ。久しぶりだな、カナハル。三年ぶりか？」
カナハルとラシュー、親友の再開に二人とも笑顔になり、力強く握手した。
「ラシュー。目的は達成したか？」
「残念ながら、まだだ。しらみ潰しに村を訪れるしかないからな。まだドンドルマに戻らないぜ」
「分かっている。ドンドルマはお前の帰還をいつまでも待っているぞ」
カナハルは言い終わると、横たわるリオンの方を向いた。
「さて、こっぴどくやられたな、リオン。イャンクックは倒したのか？」
「倒したよ。コンセントレイション・モードを使わずにね」
「コンセントレイション・モード？何だそりゃ？」
「ああ、ラシューは知らなかったな。リオンは極限まで集中力を高めると、モンスターの動きが手に取るように分かるんだ。超人的な力を持つ反面、周りが見えなくなるのが弱点だがな」
「だから、発動する時は周りのモンスターを全て倒してから発動する、って言ってるじゃん。何で発動を許さないんだよ」

リオンはカナハルに言った。力ある者は存分に出し尽くす。それが本能だとリオンは言う。

「悪いが、俺もその力はなるべく発動しないほうが良いと思うぞ。これからの戦いは、周りが見えないと戦えない。今回お前があったリオレイアは下位クラスだ。上位クラスのイャンクックは、下位クラスのリオレイアと同等か、それ以上の力を持つ。お前がいる所は、まだまだ下なんだよ」

「ラシューさんも言うかよ。でも、そうかもしれないな。俺はまだまだ未熟者だ。この力を頼らず、戦いことが大切なのかもしれないか・・・」

「そうだ。大丈夫だよ、お前は充分強い。だが、そろそろパーティーを組んだ方がいいかもな。そういえば、俺が前いた村からドンドルマに向かったハンターがいるんだ。名前は、メリッサ・アーヴィング。ランス使いで、カナハル、お前に憧れている女性ハンターだ。年齢はリオンと同じくらいだ。仲間にしたらどうだ？たぶんまだドンドルマに到着してないと思うぞ」

「そうだな。見つけたら話してみるよ。リオンも、良いよな？」

「もちろん！」

リオンが元気よく答えた。

「さあて、俺はそろそろ行くわ」

「ああ。また会おう。じゃあな」

「助けてくれて、本当にありがとな」

「リオン。お前は可能性を秘めている。きっとまた会うことになるだろうな。その時までに、少しでも強くなれよ。じゃあな」

ラシューは近くに置いてあった青色の防具を持ち、ベースキャンプを後にし、再び密林地帯に入っていった。

「あの黒い服装は私服か。なかなか似合っていたな。そして今のラシューの防具は『リオソウルZ』か。さすがだな」

「俺もいつか、ラシューさんのように、強くなる！」

リオンはラシューの後ろ姿を見つめ続けた。英雄の言葉に、リオンはより一層強くなると決意した・・・。

その後、カナハルはリオレイアを討伐した。そしてリオンとカナハルは、サティアー密林を後にした。

第五話【New friends come】（前書き）

かなり遅い更新となりました。遅れてすみません。12月になってからとても忙しくなり、更に暇を見つけて執筆したら、表せない文字があるという原因で書いた文章がまるごと消去されるというハプニングにみまわれ、精神的に参っておりました。現在問題は解決しているので心配はいりません。なお、本文ですが、やっと新作っぽくなりました。これからも、更新は遅いですが、この小説を読んでくれれば、嬉しいです。

第五話【New friends come】

ドンドルマに戻ったリオンとカナハルは直ぐ様、病院へと向かった。結果、リオンのあばら骨が三本折れていたらしい。その日からリオンは絶対安静の身となった。

それから二週間後・・・。

「祝！この俺、リオン・ウィルシャー、ハンター復帰！！」

病院から出てきたリオンが周りを気にせずに叫んだ。

「はあ～・・・。お前の生命力はモンスターなみだな。普通治るのには、一ヶ月はかかるのに、たった二週間で完治かよ」

「頑丈なのが俺の取り柄だからな」

カナハルが呆れたように言ったが、リオンは胸をはって答えた。

「まあいい。今日はパートナー探しに行くぞ。お前が休んでいる間に俺はラシューが紹介したメリッサという女性ハンターに会った」

「そうなのか？どんな人だった？」

「それは、今日正午に集会所で会う約束したから、直接会いにいけば分かる」

「ふーん。まあ、足手まといにならなければいいけど」

「病み上がりのお前が言う台詞かよ。とにかく、正午に集会所に来いよな」

「分かってますよ」

リオンは言うと、カナハルを置いて、その場からゆっくりと離れ、自宅へと向かった。

（ったく・・・。あいつ、本気でパーティー組む気があるのか？）

カナハルはリオンの後ろ姿を見ながら、苦笑した。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

そして正午、集会所にて。

リオンが集会所に入ると、いつもと同じように、ガヤガヤと酒を飲みながらハンターが騒いでいた。

リオンの防具はランポスシリーズ。損失したランポスメイルは修復不可能と判断され、破棄された。リオンはやむを得ず、余っていたランポスの鱗等を使い、再びランポスメイルを生産してもらった。

「え～と。ランス装備の女性ハンターは、と・・・」

リオンは辺りを見渡した。広い集会所にはダントツで男性が多い。身体能力とセンスが重要となるハンター稼業は、どうしても男性が多くなる。女性らしきハンターも数人見かけたが、ほとんどがガンナー装備だ。

ガンナーとは、武器にライトボウガン、ヘビィボウガン、弓のどれかを扱うハンターだ。近接武器に比べて、これらの武器はモンスターに直接接する武器ではなく、ボウガンは弾を、弓は弓矢を放って攻撃するので、力がそんなにいない。女性ハンターには格好の武器なのだ。

「いねえな。師匠もまだか」

リオンは仕方なく、そのへんにあった椅子に腰掛けた。そしてしばらくすると。

「あなた、ちょっといいかしら？」

「はい？」

リオンが声のした方向を向くと、水色の防具をした、金色のツインテールが特徴的な美しい女性が立っていた。

「ジェニファーさんから聞いたんだけど、あなたがカナハル様の弟子のリオン・ウィルシャー？」

「そうだけど・・・。もしかして、あんた、メリッサか？」

リオンが女性を見ると、背中に長い茶色のランスとわかる武器を背負っていた。

「そうよ。私はメリッサ・アーヴィング。ふーん、防具はランポスシリーズか・・・。私の防具はガレオスシリーズだから、実力は私が上ね」

「防具で実力決めるなよ！。俺の武器は『鉄刀【神楽】』だぜ！」
「あんただって武器自慢してるじゃん！ちなみに私の武器は『ロングタスク』だから、レア度はそっちが上だけど、実力は私が上よ！」
「なんだと！！」
リオンが勢い良く立ち上がった、その時。
「やめろ、二人とも！！」
「あっ、師匠！？」
「カナハル様！？」
突然現れたカナハルに二人ともびっくりし、さっきの一触即発の雰囲気は一気に消えた。
「まったく・・・。会ってすぐ喧嘩するなよ」
「す、すみません、カナハル様」
「まあ、いいよ。それよりメリッサさん、このリオンとパーティーを組んでくれるかな？無理強いはしないけど」
「とんでもございません！喜んで組ませていただきます！」
「師匠の前だと態度変わるな～」

あまりの豹変ぶりにリオンが呟いた。

「さて、今からは二人で行動してもらうよ。そろそろリオンには独り立ちしてもらいたいからね」

「やっと師匠の呪縛から逃れられるのか。嬉しいな～。師匠は帰って休んでくださいね」

「調子に乗るなよ、リオン。でもまあ、俺も今から大長老に会わないといけないからな。後はまかせたよ」

「はい。行ってらっしゃいませ、カナハル様」

メリッサが頭を下げると、カナハルは二人から離れ、集会所を出ていった。

「さてと。これからどうする、メリッサ？クエスト行くか？」

再び二人になった。リオンがメリッサに尋ねた。

「そうしたいけど・・・もう一人、ガンナーが欲しいな」

「なんで？二人で十分じゃない？」

「これからのこと考えると、ガンナーがどうしても重要になってくるからね。後ろを守ってくれるのは大きいし」

「そうは言ってもな～。探すしかないか」

リオンが言うと、メリッサは小さく頷いた。二人は集会所を見渡し

ながら歩いたが、どう見てもレベルが違いそうなガンナーばっかりで、自分と同じくらいのレベルの防具をしたハンターがいない。二人は助けを求めようと、リオンのよく知るジェニファーを尋ねようとした。そして、ジェニファーを見つけたが、様子が変だった。

「あ～・・・。ジェニファーさん、今日もまた一段と美しい。まさにこの飲んだくれが集う戦場に咲く一輪の花のよう・・・。どうです、今夜この僕と、お食事でもいかがですか？」

「またあなたですね。いい加減やめてください。迷惑なんです！」

どうやら、ジェニファーは茶髪の、髪型はポポロングの変な男にナンパされてるらしい。

「何あれ、最悪」

メリッサが呟いたが、リオンは別のことにびっくりしていた。

「あいつ、まさか・・・」

リオンはジェニファーにちょっかいをかけている男の肩を叩いた。

「相変わらずだな、ハーシェル」

「む！君はリオン！我が宿敵よ、何しにここへ！？」

「別にいいだろ、集会所にいたって。一応ハンターだし。それよりお前、そのナンパ癖、治ってないのか？」

「ナンパではない！美しいジェニファーさんに食事の誘いをしただ

けだ！」

「それが、ナンパなんだよ・・・」

リオンとハーシェルと呼ばれた男のどうでもいい会話が続いた。

「あなた、こんなやつの知り合いなの？」

メリッサがリオンに尋ねた。一方ハーシェルと呼ばれた男は、こんなやつ扱いされ、苦笑していた。

「ああ。こいつの名前は、ハーシェル・サールナート。訓練所の同期だ」

「それと同時に、我が最大の好敵手だ。リオン、お前は僕のプライドを踏みにじった許されざる人間だ！」

「お前・・・まだあのこと根に持ってるのか」

「あのこと、って、何？あっ、私はメリッサ・アーヴィングよ。今はリオンとパーティーを組んでいるわ」

話を聞いていたメリッサが尋ねると、リオンではなくハーシェルが答えた。

「僕が説明しよう、美しいメリッサさん！。僕は訓練生の中でも、弓使いながら常にトップを走ってきた。ところが、ところがだ！！卒業試験のドスランポス討伐の時に、この男がそれまでトップだった僕の討伐記録を塗り替えたのだ。しかも悔しがる僕に向かって、『あんなやつにそんなに時間かかるなんてな。お前、本当はへぼか

ったんだ』、なんて、げ、下品な言葉を言ったんだ」

「だから、あの後、俺の戦ったドスランポスは戦う前から弱っていたことが分かったから、記録は取り消す、って言ったんだけど、こいつ聞く耳持たなかったんだ」

「うるさい！僕は訓練所でサボっていながら、天賦の才能のみで上がってきた君には負けたくなかった！。だから今も必死に弓の腕を磨いている！」

ハーシェルはそう言うと、背中にせおっていた弓を取り出した。

「見よ！僕の弓、『鳥弊弓＝』を！そしてこの防具、『クックDシリーズ』を！」

ハーシェルは自慢気に武器と防具を見せた。

ハーシェルが持っている『鳥弊弓＝』は、主にイャンクックの素材で造られる火属性の付いた弓だ。初心者でもイャンクックさえ倒せれば簡単に造れるため、多くの初心者ハンターが使用している。一方、『クックDシリーズ』は、イャンクックの亜種である、青いイャンクックの素材から造られる防具だ。

亜種とは、何らかの原因で通常種の色合いが変化したモンスターを指す。そして亜種モンスターは、より強固な鱗と甲殻を持ち、攻撃スピードも上がり、それに伴い攻撃力も上昇しているため、ハンターは通常種以上に気をつけなければならない。

「へえ～。すげえな、ハーシェル。イャンクック亜種を倒したのか」

「ふっ。リオン、僕はもはや君よりも強い。これで分かったかな？」

「まあ武器や防具だけじゃハンターの能力は分かんないだろ？ここで会ったのも何かの縁だ。俺とメリッサのパーティーに入らないか？」

「「ええっ！！」」

あまりに突然な一言に、ハーシェルとメリッサは同時に声をあげた。

「ちょっ、ちょっと待ってよ、リオン！私、こんな変人と組みたくないわ！」

「へ、変人とは・・・。あなたはレディーとは言えませんね・・・。でも、リオン、君と一緒に狩りに行けば僕と君の実力の違いを見せれるな・・・。よし、リオン、僕もパーティーに加えさせてくれ」

「よし！これでパーティー完成だな、メリッサ！じゃあ早速、パーティー登録してこよう！」

ハーシェルの加入で、リオンは意気揚々と登録場所に向かった。その後ろにいるメリッサは頭をかかえ、落胆したのは言うまでもない。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

その後、三人は別れて依頼を探していた。そして約一時間後。三人

は一ヵ所に集まった。

「やっぱ、この依頼がいいな。俺は病み上がりだから、あんまり難しい依頼は避けたいからな」

リオンは十枚くらいある依頼書から一枚を指差した。

「『ドスゲネポス討伐依頼』か・・・。確かに難しい依頼ではないな」

ハーシェルが依頼を見た感想を言った。

ドスゲネポス。主に砂漠に住む、黄色い鱗を持つ、ランポスに似たゲネポスのリーダーである。鋭く尖った牙や爪に麻痺毒を持ち、その毒を一定量喰らうと全然の神経が痙攣し、一時的に動けなくなる。ドスゲネポスは、その瞬間を狙い、ハンターを死にいたらしめる。

「それにドスゲネポスがいるのは『カーライル砂漠』。ここは私の故郷に近いからよく行っていたから地形は分かる。好条件だわ」

メリッサが納得した様子で言った。

「よし、この依頼を受けよう。このパーティーの初陣だ!!」

リオンが言った。その声に反応するように、メリッサ、ハーシェルの表情が変わり、完全にハンターの表情になっていた・・・。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

時同じくして、ここは一流ハンターのみに入室が許可される、ドンドルマでも神聖なる場所、大老殿。今ここにいるのは、カナハル、そして大長老だ。

「・・・分かりました。直ちにそこに向かいましょう」

「うむ。頼んだぞ」

大長老が言うと、カナハルは大老殿を後にしようと後ろを向いた。

「おお、ちょっと待ってくれ、カナハル。一つ聞きたいことがある」

「はい、なんでしょう？」

大長老の呼び掛けに、カナハルは振り向いた。

「リオン君は元気でやっとるかの？」

「？。は、はい。怪我も完治して、今頃パーティーを組んで狩りに出掛けてると思います」

「そうか。いや、引き止めて悪かったの。もう行ってよいぞ」

「は、はい・・・」

カナハルに不思議に思いながらも、大老殿を後にした。

第六話【Ｐａｒａｌｙｓｉｓ　ｄｅｓｅｒｔ】

カーライル砂漠・・・。

峻険な山に囲まれた岩場地帯と広大な砂漠地帯が広がるフィールドである。昼夜の気温差が激しいのが特徴で、特に砂漠地帯は昼は灼熱の太陽に照らされた熱砂が、夜には急激に冷え込み、寒冷地へと変貌し、ハンターを苦しめる。

リオン、メリッサ、ハーシェルの三人がここで活動を開始しようとした時は昼。三人に灼熱地獄が待っていた。

「あ、暑い・・・」

「全くだな。僕も暑いのは苦手だ」

リオンとハーシェルは照らされる太陽を見上げながら言った。

「だらしないわね、男どもは。私なんか、どうとでもないのに」

「そりゃお前・・・防具のおかげだろ」

メリッサの言葉に、リオンが反論した。

メリッサが今装備しているのはガレオスシリーズ。
この砂漠地帯に群れて生息する飛竜、ガレオスの素材で造られる防具である。通気性が良く、シリーズとなるとどんなに暑い所でも体に害が無くなる『暑さ【大】無効』というスキルが付く。まだ砂漠地帯ほど暑さが厳しくないベースキャンプでは、砂漠地帯に近い村

出身のメリッサにとっては全然苦にならないのだ。

「ほら、さっさと行くわよ。ドスゲネポスの徘徊ルートは知ってるから、私についてくればいいわ」

「は～い。頼みますよ」

しぶしぶリオンとハーシェルはメリッサの後を追った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「更に暑くなったな・・・ここはどの辺りだ、メリッサ？」

暑さに苦しむリオンが言った。

「この辺りは地図で『エリア2』って書かれてる所よ。砂漠地帯だから、クーラードリンクを飲んだほうが良いわよ」

メリッサが言う『エリア2』とは、ベースキャンプ近くにある砂漠地帯だ。どこまでも広がる砂漠に、三人の目線のはるか先に動く物体が見えた。

「あれはゲネポスだね。合計五体か・・・」

暑さを一時的に和らげる飲み物、クーラードリンクを飲み、双眼鏡を覗き、物体を見たハーシェルが言った。

「子分たちが殺られれば親分も黙ってはいない。先にゲネポスたちを狩っておきましょう。そうすればドスゲネポスも自然と出てくるわ」

「まあ、それが一番良いな。じゃあ早速、このパーティーの初めての戦闘といきますか」

リオンが言って勢いよく飛び出すと、メリッサ、ハーシェルも走り出した。

数分後、三人と五体のゲネポスの距離がどんどん縮まり、ゲネポスは三人に気付き、仲間に敵襲を報せる鳴き声をあげた。

「まずは僕がいくよ！！」

ハーシェルは赤い弓、『鳥弊弓＝』を取り出すと同時に弓矢を手に取り、走りながら弦を引き絞った。

グワアア、グワアア！！

ゲネポスたちは臨戦体勢になり、麻痺毒を仕込んでいる爪を前に構え、三人に向かって走っていく。そして先頭を走るリオンとゲネポスとの距離が約１０メートルとなった時。

「はあっ！！」

ハーシェルの弓の、引き絞られた弦から三本の弓矢が放たれた。

グワアア！？

弓矢は前方にいるリオン、メリッサを避け、かつ三体のゲネポスに一本ずつ突き刺さった。命中したゲネポスたちは突然の攻撃にのけ反り、走るのを止めた。

「今だ！！」

瞬間リオンは隙を見逃さず、抜刀しながら『鉄刀【神楽】』を降り下ろした。

ギャワアア！

まさに一閃。リオンの太刀はゲネポスの胴体を一刀両断した。悲鳴をあげ、大量の血を吹き出しながらゲネポスは絶命した。

仲間の死に、残ったゲネポスは動きを止めた。

「はああっ！！」

メリッサは立ち尽くす一体のゲネポスに『ロングタスク』と呼ばれるランスを取り出すと、その勢いそのままに突きをくらわせた。

「もう一回！！」

間髪いれず突き刺さったランスを引き抜くと、再び突きを放った。

ギャウウ！！

腹部に致命傷を負ったゲネポスは勢いを殺せず、吹き飛ばされ、絶命した。

「やるな、メリッサ！」

「そっちこそ！！」

一言言い合うと、即座に残ったゲネポスを一体ずつ速やかに戦いを挑み、これに勝利した。

グワアア・・・

残った一体は諦めたのか、二人に背を向け、逃走を始めた。その時。

ドスッ！！

と、鈍い音がなった。ゲネポスは足を見ると、左後ろ足に矢が突き刺さっているのを見た、と同時に体勢を崩し、転倒した。

「逃走とは、美しくないねえ～。華々しく散るのも美学だと思うよ、僕は」

声の主はハーシェル。彼は逃げるゲネポスを見るや、弓矢を放ち、見事命中させたのだ。

ハーシェルはゆっくりとゲネポスに近づき、そして弓矢を手に取ると、弦で引き絞ることはせず、そのまま手を勢い良くふりおろし、ゲネポスの頭部に弓を突き刺した。

グワアア・・・

断末魔をあげ、ゲネポスは静かに息をひきとった。

「グロい死なせかたするなあ～、ハーシェル」

「外形を崩して殺すほうがよっぽどグロいと思うけど？」

「相変わらず、お前の美学は分かんないな。けど、お前の弓のテクニック、すげえな」

「確かに・・・。私たちに当たらず、かつゲネポスに当てるのは、凄い技術よ。あなたのこと、見直したわ」

「いやいや、メリッサさんのランステクニック。感服いたしました」

「俺の評価は無しかよ。やっぱりあの頃と変わってないな」

勝利後の会話が弾む。しかしこれは真の勝利ではないことも三人は分かっていた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

それから三人は南に向かった。途中、少数のゲネポスが待ち構えていたが、三人は力を合わせて討伐した。

そしてここはエリア５の中央。

「まだ現れないのかよ。こんなに討伐してるのに」

「愚痴を言わないの、リオン！。でも群れには危機感が走っているみたいだから、必ずドスゲネポスは現れるわ」

「そうだといいけど・・・」

リオンは、そう言うと太刀を砥石で研ぎ始めた。その時。

「！！！！」

言葉にせずとも分かる殺気を三人は感じとった。三人は辺りを見渡した。

「あそこだ！！洞窟の入口にドスゲネポスがいるぞ！！」

ハーシェルが叫んだ。研ぎ終えたリオンとメリッサが地図ではエリア６と書かれている洞窟の入口を見た。

そこに立つのは、緑と橙の縞模様が特徴的な、ゲネポスよりも巨大な物体。大きく発達した牙や爪、トサカを持つゲネポスのリーダー、ドスゲネポスだ。更にドスゲネポスの側には五体のゲネポスが付き従っていた。

「やっと親分の登場か！」

リオンが太刀を構え、臨戦体勢に入る。

グオオウ、グオオウ！！

ドスゲネポスの鳴き声が砂漠に響く。瞬間。

グワアア、グワアア！！

別の所から次々と鳴き声が聞こえた。

「なんだ！！」

リオンがびっくりして言った。

「どうやら僕たちは囲まれたようだね。東西からもゲネポスが出てきてるよ」

ハーシェルの言う通りだった。エリア１とエリア１０から五体ずつゲネポスが現れた。北東西からゲネポス。南は崖。まさに背水の陣だ。

だが三人は危機感など持っていなかった。

「いいね～！戦いはこうでなくちゃな！！」

「数が全てでは無いわ。私たちの力を見せつけましょう！」

「集団攻撃とは美しくないね。僕が美学と言うものを教えてあげるよ！」

リオン、メリッサ、ハーシェル。それぞれ思考は違えど、ハンターという共通する絆が三人を結束させる。

グオオウ、グオオウ！！

ドスゲネポスの鳴き声と同時に、全てのゲネポスが三人に向かって走り出した。三人はそれぞれ背中を仲間にあずけ、迎撃体勢になった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

最初の攻撃は、弓を持つハーシェルだった。

ハーシェルは弓矢を五本手に取ると、その弓矢を使って弦を引き絞り、力を溜めた。狙うは東から迫り来る五体のゲネポス。そして、そのゲネポスたちが爪を振りかざし、襲いかかろうとした。

バシュッ！！

攻撃範囲内に入ったと判断したハーシェルが弓矢を放った。

グワアア！？

まさに神業。放たれし五本の弓矢は、ハーシェルに迫る五体のゲネポスに、場所は違えど、五体全ての体に突き刺さった。

ゲネポスの苦しみの声を聞いたリオンとメリッサは、それぞれ北と西から迫る五体のゲネポスを睨み、そして。

「うおおお！！！」

攻撃範囲内に入った一体のゲネポスを狙い、リオンは叫び声をあげ、一歩踏み込むと同時に太刀を振りおろした。

グワアアウ！！

頭部に斬撃を受けたゲネポスは倒れ、絶命した。

だが、攻撃後の隙を狙って、二体のゲネポスがリオンの背後から飛び掛かった。

リオンが気付いた時にはもう遅かった。直撃すると思われた。その時。

バシュッ！！

何かが飛翔する音。

グワアアウ！！！

苦痛と共に、リオンに襲いかかった二体のゲネポスは吹き飛ばされた。

「一つ、貸しだよ、リオン」

ハーシェルが言った。彼は、リオンのピンチを悟ると、瞬間的に弓矢を取り出し、弦を引き絞り、放ったのだ。直ぐに放ったので、威力はないが、跳躍し、空中にいるゲネポスを吹き飛ばすには十分だった。

「サンキュー、ハーシェル！」

リオンは吹き飛ばされたゲネポスを見ながら言った。

ハーシェルは小さく笑った。しかし、ふと後ろを振り返ると、三体のゲネポスが麻痺毒を仕込んだ爪を構えていた。

「くっ！！接近戦は苦手なのに！！」

ハーシェルは言った。もともとガンナーとは遠距離攻撃が基本だ。敵と近すぎると、行った攻撃の威力が上がらないのだ。本来なら直ぐに離れ、距離をとるのが一般的だが、現在、ゲネポスの群れが自分たちを囲んでいる。リオンとメリッサから離れるのは、かなり危

険だった。

「こいつらは任せなさい！！」

そんな彼に現れた一人のランスを構えた女神がいた。

「すみません、メリッサさん！！」

ハーシェルは、自分の前に立ったメリッサに向かって言った。そして彼は直ぐに矢を取り出し、ゲネポスへの迎撃を再開した。

こうしたやりとりを見て、リオンは、ふと思った。

（俺の背中をあいつらが護（まも）ってくれる。だから俺はあいつらの背中を護る。目の前の敵に集中しながらも、仲間が危なかったら直ぐに助ける。これが、パーティーか・・・）

三人の力、そして厚い信頼が備わっている、このパーティーの前では、ゲネポスの群れは敵うはずもなかった。みるみる内に数を減らし、そして・・・。

「これで最後！！」

リオンが一体のゲネポスにとどめをさした。辺りにはたくさんのゲネポスの死体が並んでいた。

三人は、所々に傷を負ったが、１５体のゲネポス全てを討伐したのだ。

グウウウ・・・

残されたドスゲネポスが唸った。

「あれほどの数なら自分が手を出さずとも勝てると思ったようだけど、僕たちを甘く見ないほうがいいよ」

「そうそう。私たちはこんなところで終わるようなハンターじゃないわ」

ハーシェルとメリッサが言った。

人間の言葉は分からないドスゲネポス。だが、挑発をされていることは理解したのか、ドスゲネポスは突如、一体で三人に戦いを挑もうと、駆け出した。

「理性を失ったやつが俺たちに勝てると思うな！！」

リオンはドスゲネポスに向かって走り出した。

リオンはドスゲネポスに向かって一歩踏み込むと同時に太刀を振りおろした。ドスゲネポスは右腕を使って受け止めた。

「なにっ！！」

リオンが驚いた。太刀はドスゲネポスの右手に食い込み、そこから血が溢れていた。自らの腕を犠牲にしてまで防御したドスゲネポスの狙いは、残った左腕での攻撃だった。

グワアア！！！

ドスゲネポスは左手の爪をリオンの顔に突き刺した。

「くっ！！！」

襲いかかる激痛に、たまらずリオンは太刀を振り上げてドスゲネポスの右手から離れさせると、自身も後ろに跳び、ドスゲネポスから距離をとり、着地しようとした。その時。

「なんっ！！」

リオンは驚愕した。体がいうことを聞かず、神経が硬直した。足に力が入らず、派手に転倒した。

（しまった！麻痺毒か！！）

リオンは思った。あのゲネポスとの戦いで蓄積した麻痺毒が、さっきのドスゲネポスの攻撃で効果が発動したのだ。そんなリオンにドスゲネポスがとどめをさそうと、リオンの首めがけ、両爪を振り下ろした。

（くっそお・・・）

何も抵抗できず、ただただドスゲネポスの両爪を見ることしか、リオンにはできなかった。

ズブッ！！！

鈍い音がした。その突如。

グオオォウ！！！

ドスゲネポスの悲鳴にも似た声が空を切った。

「まったく・・・。一人でなぜ突っ込む、リオン？」

「ほんとよ。私たちがいるんだから」

弓矢が右腕に突き刺さり、後退りしたドスゲネポスと倒れているリオンの間に、メリッサとハーシェルが愚痴を言いながら割って入った。

「あ、ああ。わるい・・・」

麻痺毒の作用が消え、リオンは立ち上がりながら言った。

「ついつい、一人で戦っている時のように行動しちまった」

「今は過去と違うぞ、リオン。弓で遠距離攻撃できる僕と、敵の攻撃を受け止めるメリッサさんがいる。三人の力が合わされば、あのドスゲネポスなんか、楽勝なんだよ」

「そうだな。反省したよ」

リオンはそう言うと、威嚇行動をとっているドスゲネポスを睨み付けた。

「さあて、反省したついでに、協力してあいつを狩りますか！！」

リオンが叫ぶと、太刀を構えた。メリッサとハーシェルは、言葉は言わなかったが、それに同意すると分かるように、それぞれ武器を

構えた。

グワアアウ！！！！

敵意を剥き出しにして、ドスゲネポスは三人に向かって走り出した。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

だが、子分たちを殺され、復讐に取り付かれたドスゲネポスは、判断力が欠けていた。

もともとドスゲネポスはゲネポスと連繋して攻撃することが最も得意であり、ハンターもそれを恐れている。今、連繋が出来ないとなると、素直に逃げ出すのが賢明だった。

ドスゲネポスに勝機はなかった。圧倒的なゲネポスの数で攻めるドスゲネポスは、一体で三人に挑む、愚かな行動をとったのだ。

一刻がたった時、ドスゲネポスは地に倒れていた。おびただしい量の血が、彼の周辺の砂を赤く染めた。

「討伐完了っと。さあ、剥ぎ取るか」

「そうだね。彼の命を無駄にしないために」

「ドスゲネポスよ。安らかとは言えないが、永遠の眠りを・・・」

三人のハンターは一言言うと、ドスゲネポスの身体を解体し始めた。その胸中には、喜びもあったが、それとは全く別の感情もあった・・

第六話【Paralysis desert】（後書き）

ドスゲネポスの戦いの描写が少ないですね。すみません。動きがゲネポスと一緒なので、戦いが単調になると思って、省(はぶ)きました。しかしこう書くと、三人が異様に強く感じますね。次からはちゃんと書きます。ちなみにサブタイトルは、【麻痺砂漠】という意味です。今後しばらく、サブタイトルは英語でいきたいと思います。行が変わって分かりにくいこともあると思いますが、どうか暖かい目で見ていてください。

第七話【Act of kindness】

ドスゲネポス戦に勝利した、リオン、メリッサ、ハーシェルは意気揚々とドンドルマに帰還した。

この戦いで、互いが互いの実力を認め、絆を深めたことが、大きな収穫だったようだ。

その後、リオンは完全に力を取り戻したことにより、少し難しい依頼を受注した。

『大怪鳥イャンクック』の狩猟である。しかも五回も受注した。

もともとイャンクックは時々大量発生する、ハンター界では初心者の登竜門と言われている存在であるため、上級者は手をつけない。ましてや、ここは大陸最大の街であるドンドルマ。イャンクックの狩猟依頼など次々と現れるのだ。

三人は、この五回にも及ぶイャンクック戦で、より一段と力をつけた。そして・・・。

「親父さあああん！！！！」

リオンが叫んだ。ここはドンドルマのとある鍛冶屋。

「おう、リオンか。今日も威勢がいいな。ここに来た目的は知っているぜ。新しい防具、完成してるぜ」

「マジっすか！？よっしゃあああああ！！！」

「この品の無い怒号・・・。やはり君は美しくないね」

リオンの再びの叫び声に、側にいたハーシェルは呟いた。その声を聞いて、同じく側にいたメリッサはクスクス笑った。

「おや？そちらの二人は見たことないね。リオン、お前の知り合いか？」

「ああ、そういや親父さんにはまだ会わせてなかったな。紹介するよ」

「リオン、お前に紹介されたらかなわん。自分で名乗るさ。僕はハーシェル・サールナート。優秀な弓使いです。以後宜しく」

「自分で優秀って言わないでよ。こっちまで変だと思われちゃうでしょ？。鍛冶屋さん、私はメリッサ・アーヴィング。ランス使いです。これからお世話になります」

「ほう。ハーシェルさんにメリッサさんか。ふっ、リオンにお似合いの仲間だな。こちらも自己紹介しよう。俺は、ナラム・ギエレク。ここにくるハンターには親父さん、って言われているから、名前の方は忘れてくれて構わんよ」

「宜しくお願いします」

メリッサとハーシェルは、鍛冶屋の棟梁、ナラムと握手した。

「親父さん！そろそろいいか？早く防具を見せてくれ！！」

「相変わらずせっかちだなあ。本当にお前はラシューに似てるよ」

「ラシュー？三年前、世界を救った英雄、ラシュー・クルトイオンですか？」

メリッサが尋ねた。

「ああ。あいつも、この鍛冶屋の常連だったよ。といっても、あの戦いの後はあいつの姿を見てないがな。カナハルは変わらず来ていたな。ここ最近見かけないけど」

「師匠なら、しばらくドンドルマから離れるそうだ。何でも、大長老から極秘任務を授かったらしいけど。まあ俺としちゃあ、師匠がいなくなって、自由に依頼がこなせるようになったから、ラッキーだけど」

「はは、そりゃよかったな。さてと、ちょっと待ってろ。今持ってくる」

ナラムは言うと、鍛冶屋の奥に入っていった。そして数分後。

「ほらよ。これが『クックシリーズ』だ」

ナラムが現れた。そして手に持った赤い防具をリオンの前に置いた。クックシリーズは、イャンクック通常種の素材で造られる防具だ。この防具は今リオンが身に付けている『ランポスシリーズ』より数段強度があり、火耐性も優れている。

「やっとか！待ちくたびれたぜ！！」

「『クックシリーズ』か・・・。まあ、この三人の中では一番下だね」

「うるせえぞ、ハーシェル。ああ、あと聞きたいんだけど、親父さん？」

「ん？なんだ？」

「俺の太刀を強化するには、何を狩ればいいんだ？」

リオンは、自分が持っている『鉄刀【神楽】』の強化先を聞きたかったようだ。

「ああ。その強化先は三つある。だがその内二つは不可能だ。なにせ古龍種の素材がいるからな。残る一つの強化先、その名は『斬破刀』」

ナラムがリオンを見つめながら言った。

「『斬破刀』か・・・」

「ああ。造るにはマカライト鉱石とかの鉱石類の他に、大事な素材がいる。それは『電気袋』だ」

「電気袋？なんだそれ？」

「それは僕が答えよう。電気袋とは、中級飛竜『フルフル』から剥ぎ取れる、文字通り電気を帯びた袋だ！」

「何でそんなに楽しそうなんだよ、ハーシェル？」

ハーシェルの異変を感じとったリオンが言った。

「ふふふ。僕は、そのフルフルの素材を使う、『フルフルシリーズ』が造りたいんだ！！一度とあるハンターが身に付けたのを見て以来、僕は憧れていた！！あの美しい防具を身に付けたいと！！」

「フルフルシリーズを？私は御免だわ。資料で見たけど、見るからに不気味なあいつの防具なんて、死んでも嫌だわ」

ハーシェルの熱弁に、メリッサは嫌気をさした。

フルフル。主に沼地に生息する、全身が白い飛竜だ。電気を自在に操ることが出来るが、何より外見が不気味なのだ。目が退化して消滅し、ほとんど口しかない顔におぞましい鳴き声を発する咆哮。そのことから多くのハンターが嫌うが、その素材から造られる防具は不思議な力が宿ると言われている。

「だがお前さんたちでは倒すのは、まだ難しいと思うぜ。もっと力をつけてから挑むといいぜ」

「親父さんがそう言うのなら、そうなのかもな。じゃあ明日、集会所で会おうぜ」

「そうね、そうしましょう」

「ふふふ・・・。フルフルの話が出来て嬉しいよ！今日は良く寝れそうだ！」

三人は言うと、鍛冶屋を後にした。新たな防具を手にしたリオンは、特に意気揚々と自宅に向かった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

翌日、ここは集会所。新しい防具、『クックシリーズ』を身に付けたリオンと、メリッサ、ハーシェルは新たな依頼を探していた。

「うーん、いいの無いな～」

依頼書がいっぱい貼られている掲示板には今の自分たちの実力にあった依頼が見当たらず、リオンは愚痴をこぼした。リオンは探すのを諦め、別の掲示板を見ているメリッサとハーシェルのもとに向かった。

「どう？いい依頼あった？」

「うーん、これといっていいのは無いわね」

「僕は一度イャンクックの狩猟の依頼書を見たけど、もうこりごりだからね。かといって他の依頼は難しいものばかり。ドンドルマでも、そんなに都合良く、いい依頼は現れないか」

「そうか・・・。こうなったら、ジェニファーさんに尋ねるしかないな」

リオンはそう言うと、受け付けでハンターが持ってきた依頼書の受注手続きを行っていたジェニファーの所に向かった。メリッサ、ハーシェルもリオンの後についていった。

「こんにちは、ジェニファーさん。ちょっといいかな？」

「あら、どうしたの、リオン君？」

受注手続きが一段落ついたジェニファーにリオンが尋ねた。その後ろでハーシェルが

「今日のジェニファーさんも、また一段と輝きを増している！！」

と言ったが、他の三人は軽くスルーした。

「俺たちに合った依頼って、ありませんかね？あっ、イャンクックは嫌ですからね」

「そうね～。基本的に掲示板に貼ってある依頼書で全てなんだけど・・・。あっ！ちょっと待ってて」

何か思い当たる節があるのか、ジェニファーは受け付けの奥に入っていった。そして数分後、ジェニファーが一枚の紙を持って現れた。

「私の友達から言われたんだけど、このところ『ヒジュラ沼地』でゲリョスが現れるらしいの」

「ゲリョス・・・『毒怪鳥』ゲリョスですね」

『毒怪鳥』ゲリョス。頭にある大きなトサカが特徴的な鳥竜種に分類される飛竜である。

攻撃パターンはイャンクックと似ているが、それと決定的に違う行動パターンがある。

それは自慢のトサカを打ち合わせることで、強烈な閃光を発して目を眩ませるのだ。

しかもこの閃光は、どういう訳か、目をつむっても、ゲリョスに背

を向けても目が眩んでしまう。一説によると、ゲリョスは閃光と同時に衝撃波を放っており、目をつむっても衝撃波が脳に衝撃をあたえ、目が眩むのと同じ状態になるらしい。今のところ対策としては、目をつむり、同時に盾などで頭部を中心にガードすること。そして目をつむり、横っ飛びなどの回避行動をとることしかない。

そしてゲリョスのもうひとつの特徴。それはゴム質に近い、群青色の皮膚だ。この皮膚はハンマーなどの打撃攻撃に強く、また絶縁性が高く、痺れさせて動きを止めるシビレ罠にも耐性を持つ。

また、ゲリョスが吐き出す液体はモンスター界随一の猛毒が含まれるため、ハンターは解毒薬を欠かさず持ち込まなくてはいけない。しかしゲリョスはイャンクックを凌ぐ体格を持つ割に臆病でも知られている。

「そうよ。でもまだ現れる程度で被害はないし、ゲリョスは臆病だから、現時点では依頼にすることでもない、って、ギルドは楽観視だわ。でも私の友達のいる村はヒジュラ沼地に近いし、ゲリョスの猛毒を受けた大地に農作物は育たないと聞くから、私はどうにかしたい、って思ってたの。そこで、お願いなんだけど・・・」

「俺たちがヒジュラ沼地に現れるゲリョスを狩る。それでいいんですね？」

リオンの言葉に、ジェニファーはたまらず微笑んだ。

「ゲリョスだったら、私たちでも倒せるわね。人助けも出来て、一石二鳥だよね」

「人助け・・・ああっ、何と美しい響きなんだ！大丈夫ですよ、ジ

エニファーさん！僕の弓がやつに風穴を開けてやりますよ！」

「みんな・・・ありがとう！報酬金は頑張って集めるからね。頑張ってね、三人とも！」

ジェニファーの言葉を聞き、リオンはメリッサ、ハーシェルのいる方向を向いた。

「じゃあ早速、準備に取りかかるぞ！人助けの狩り、楽しもうぜ！！」

リオンは言うと、意気揚々と集会所の出口へと向かった。メリッサ、ハーシェルも彼に続き、そして三人は集会所を後にした。

そして数時間後、三人はヒジュラ沼地へと向かっていった。相手はずっと戦っていたイャンクックとは違う敵、ゲリョス。三人は来る戦いに胸が踊っていた・・・。

第七話【Act of kindness】（後書き）

サブタイトルは、【人助け】という意味です。こうしてサブタイトルをつけると、改めて英語の熟語は分かりにくいですね。現在、僕の通う大学は休業中ですので、なるべく更新スピードを早めたいと思っています。これからも宜しくお願いいたします。

第八話【Ｐｏｉｓｏｎ　ｓｗａｍｐ】（前書き）

今回はゲリョス戦の前半です。ドスゲネポス戦とは違い、戦いはちゃんと書きます。

第八話【Ｐｏｉｓｏｎ　ｓｗａｍｐ】

ヒジュラ沼地。

じめじめとした沼沢地、霧に覆われた狭隘（きょうあい）な土地からなる土地であり、いくつかの洞窟がある。

「さすが沼地だけあって、雨がすごいな」

事前に支給品を受け取り、ベースキャンプの中に待機していたリオンが愚痴をこぼした。それほどまでに今の状況は良くなかった。

滝のように落ちる豪雨。それはハンターの視界を狭め、上空への監視が難しくし、戦闘中も、モンスターの気配を消すのだ。

「沼地じゃ、こんな雨は日常茶飯事よ。まあ夜になれば止むでしょ。さあ、ゲリョス戦にむけて、雑魚どもを狩っておきましょ！」

「それもそうですね。この辺りはゲネポスやイーオスが出るそうだからね」

「そうなのか？まあ、暇潰しにはなるかな。じゃあ早速行こうぜ」

リオンは言うと、ベースキャンプから出て、北の狩り場に向かった。

「リオンのやつ、この沼地に来たことあるのかしら？」

「無いでしょうね。この警戒心の無さ、僕は呆れるね。まあそれがあいつの良いとこなんだけどね」

二人はそう言うと、リオンの後をついていった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

数十分後。地図でエリア５と書かれている場所に着いたリオンは周りを見渡した。

「なんか・・・イメージと違うな」

一言、リオンは言った。後ろにいたメリッサ、ハーシェルは、その理由を直ぐに見つけた。

このエリア５の周りには、ゲネポスやイーオス等はいなかった。かわりにいたのは、モス、と呼ばれる、名の由来通り、体にコケ等の菌類が繁殖しているブタである。

彼らは普段大好物のキノコを探して辺りを徘徊しているが、性格は温厚であり、近くにハンターがいても、怒らせなければ襲われることは、まずない。

「どうやら、この辺りのゲネポスやイーオスたちは夜行性のようね。モスは別に狩る必要は無いよ。さあ、先に進もっか」

メリッサの声で、他の二人は、戦いを期待している気持ちを抑えながら、しぶしぶ歩き出した。

三人は更に北を目指した。だが、エリア６についても辺りはモスしかおらず、戦うことはせず、このエリアを通過した。

しばらくして、地図でエリア８と書かれている場所に着いた。ここには、モスとは別のモンスターがいた。

「あれはブルファンゴだな。厄介なモンスターがいるな」

リオンの言う通りだった。彼の数十メートル先にいる、茶色のイノシシ。巨大な牙を武器にし、ハンターを見つけると突進してくる。それがブルファンゴだ。

「ブルファンゴは厄介ね・・・。ゲリョスと戦う前に狩っておきましょ」

「そうですね。ブルファンゴも、僕たちに気付いたようですから」

ハーシェルの言葉にびっくりしたリオンは、改めてブルファンゴのいる方を向いた。

確かに、ブルファンゴはこちらを見ており、突進する構えをとっている。その数、三体。

「さて、肩慣らしといくか！」

リオンは言うと、勢い良く走り出した。時同じくして、三体のブルファンゴが突進してきた。

数秒後、リオンと、彼に向かっている一体のブルファンゴの距離が縮まり、そして接触する、その瞬間。

「はっ！！」

リオンは横っ飛びし、ブルファンゴの突進を避けた。ブルファンゴは避けられたのを知ると、急ブレーキをかけ、その場に止まった。

「甘い！！」

リオンはその瞬間を狙っていた。彼はブルファンゴの後方から、抜刀すると、その勢いを殺さずに、太刀を振り下ろした。

グオオオウ！！

胴体を切り裂かれ、ブルファンゴの悲鳴に似た声が聞こえた。リオンは間髪入れずに、今度は太刀を横に向け、ブルファンゴを斬ると同時に数歩下がった。いわゆる、斬ると同時に相手と距離をとる、斬り下がりという攻撃である。

グオオオウ・・・

大量の出血と激痛に、ブルファンゴは断末魔をあげながら、その場に倒れ、絶命した。

リオンは一息つくと、辺りを見渡した。残りの二体のブルファンゴはそれぞれ、メリッサ、ハーシェルの攻撃を受け、しばらくして絶命した。

「よし、これで片付いたわね」

「もともとブルファンゴなんて、修行してた時に嫌と言うほど狩ったからな。楽勝だよ」

「それは自慢にならないぞ、リオン。さあ、先に進もう。この先に

は南に向かう道があり、エリア４に続いている」

「別に自慢してないのにな・・・」

リオンは苦笑しながら歩きだした。

それから歩いて、エリア４に着いた。ここでも数体のブルファンゴがいたが、三人は協力して狩った。

それから数時間たった。三人はエリアを巡回しながら、ブルファンゴ等の厄介なモンスターを狩っていた。だが未だにゲリョスは現れていなかった。

「くそ～。何時間たてばゲリョスは現れるんだよ・・・」

豪雨が激しくなり、ベースキャンプに戻って休んでいたリオンが愚痴をこぼした。

「だいたいモンスターは狩ったから、今は休むのよ、リオン」

「わかってるけどさ・・・。そういえばハーシェルはどこに行ったんだ？」

「彼ならこの沼地にある、素材になりそうなものを採種しに行ったわ」

「俺に言わないで行ったのかよ。相変わらずだな。そうか、素材採種か・・・。洞窟になら鉱石がありそうだな。俺も探しに行くか」

リオンはそう言うと、ベースキャンプから出ようとした。

「ねえ、一つ聞いてもいい？」

「ん？何だ？」

突如、メリッサがリオンの前に立った。

「カナハル様って、何料理が好きなの？」

「はい？何だよ、その質問は！」

「いいから早く答えなさいよ！！」

「ったく、訳わかんねえよ。ええと、師匠はわりと野菜を多く食うな」

「ベジタリアンなの！？素敵・・・！」

「何で、ベジタリアンが素敵なんだ？」

メリッサの反応にリオンは困惑した。

「でさ、でさ！あとカナハル様の趣味は何？」

メリッサは興奮したのか、質問を言うと、リオンに近づいて来た。

（師匠の趣味？ってか、顔近い！）

今やメリッサとリオンの顔の間は数センチしかない。

「ええと・・・。邪魔するけど、いいかな？」

「え・・・」

メリッサは視線をリオンから外し、ベースキャンプの出口を見た。

「ハーシェル！？い、いや、これは違うのよ！！」

「何を慌ててるんだ？」

「あんたは黙ってなさい！！」

メリッサはリオンを一喝した。そのリオンは、自分が何故怒られたのか理解出来ず、首を傾げた。

「まあ、今の出来事は忘れましょう。それで、一通り素材を集めたから、そろそろ出発しようと思ったんだけど、いいかな？」

「え、ええ！そうしましょ！リオン、行くよ！！」

「ったく、自分勝手だな」

リオンは苦笑した。メリッサは、さっさとベースキャンプを飛び出し、リオンとハーシェルを置いてエリア５に向かって行った。

「何を怒ってるんだ？あんなに顔を赤くして・・・」

「ふっ、リオン。お前に女性は、まだ早いよ」

「はあ！？おい、ハーシェル！勘違いすんなよ！俺とメリッサは師

匠のことで話してたんだぞ！」

「ふふふ・・・僕は会話の内容なんて尋ねてないよ。リオン、焦ることはない。ゆっくり、じっくりと、愛を育むんだ」

「んな気持ちは無い！勝手に解釈すんな、このナンパ野郎が！」

リオンは激怒しながらメリッサの後を追った。

「おい！ナンパ野郎とは何だ！僕がいつナンパした！！」

「いつも、だ！！」

「待ちたまえ、リオン！ちゃんと根拠を説明してもらうぞ！！」

ハーシェルもまた、激怒した。そしてリオンの後を追った。

その後リオンは、なんとかハーシェルの誤解を解き、三人は再びエリア５に来た。

「まあ、相変わらずモスだけだな」

リオンは変わらぬ環境に愚痴をこぼした。

「まずいわね。このままだと夜になるわ。早く戦いたいのに」

「ちょっと待ってくれ。なんで夜になるとまずいんだ？」

「全く・・・リオン、君は何も知らないのか？このヒジュラ沼地は夜になると、多くの沼地で毒が発生して、毒沼地となるのだよ。そ

の毒は足を踏み入れただけで僕らに異常を起こすんだ」

「へえ～。知らんかった・・・」

リオンの反応に、メリッサとハーシェルは共に呆れた表情をした。

その時。

「ん・・・？」

リオンは一言言うと、上を見渡した。

「どうした？」

「上から何か聴こえたんだ。静かにしてくれ」

リオンの声で、二人は喋るのを止め、上空を見渡した。

フュオオオオオ・・・

はるか上空から、風を切る音が聴こえてきた。ハーシェルは咄嗟に双眼鏡を取りだし、上空を双眼鏡を通して見た。

「！！。ゲリョスだ！！」

「何ですって！？」

メリッサはびっくりし、声をあげた。

「やつは北に向かっている！！おそらくエリア６に向かっているんだ！！」

「よし！早く行くぞ！」

「そうしましょう！。早く決着をつけないと夜になるわよ！」

三人は直ぐ様北に向かって走りだした。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

エリア６。

モスたちが歩いている、この大地に巨大な物体が降り立った。

群青色のゴム質に近い皮膚に、褐色の伸縮性のある尻尾。そして特徴的なトサカを持つ飛竜が、そこにいた。

「あれがゲリョスか・・・」

物陰に隠れてゲリョスを見ている、三人の先頭にいるリオンが呟いた。

「やつの弱点は火。僕くの弓は火属性があるから、僕が積極的に攻撃するよ」

「それがいいわね。私とリオンはゲリョスを引き付ける。そして早いうちにあのトサカを破壊する」

「OK。じゃあ、作戦開始だ」

リオンが言うと、ハーシェルはそっと立ち上がり、前方の、近くにあった巨大な木に隠れながら、弓を構え、弓矢を手にとった。

「ハーシェルの腕の見せ場だな」

その様子を見ていたリオンが呟いた。

「ふううう・・・」

ハーシェルは一息吐くと、そっと巨木の陰からゲリョスのいる方を見た。

ゲリョスはハーシェルに気付いていない。だが、野生の本能が何かを悟ったのか、ハーシェルの隠れている巨木に向かって歩き出した。

ドスン、ドスン・・・

一歩、一歩近づく音を聞き、ハーシェルは弦に弓矢を当て、引き絞った。

（今だ！！）

数秒後、ハーシェルは決意した。

ハーシェルは巨木から飛び出すと、引き絞った弓矢を放った。

グアアアウ！！！

ゲリョスは突然現れたハーシェルに気付き、仰天の声をあげた。その瞬間、五本の弓矢がゲリョスに襲いかかった。

バアアアン！！！

ゲリョスの皮膚に当たった弓矢が爆発した。ハーシェルとゲリョスの距離が近かっただけに、威力は落ちたが、五本全ての弓矢がゲリョスに当たった。

「よしっ！！」

ハーシェルの奇襲が成功したと分かると、リオンとメリッサは物陰から飛び出し、ゲリョスに向かって走りだした。

グアアアウ！！！

ゲリョスは敵の襲来を知ると、瞬時に臨戦体勢をとった。普段は臆病なゲリョスだが、自らの命を狙う者には闘争心をむき出しにして戦う。

ゲリョスは自身を軸にし、回転して尻尾を振り回した。

（まだ当たらない！）

リオンは臆せず突っ込む。だが・・・。

「なんっ！！！」

リオンはゲリョスと戦うのは初めて。故に知らなかった。ゲリョス

の尻尾はよく伸びることを。

リオンは振り回された尻尾にまともにくらい、数メートル吹き飛ばされた。

「マジかよ。あんなに伸びるのかよ！」

リオンは言うと、直ぐに立ち上がった。ゲリョスはリオンに追撃しようと、リオンのいる方を向いた。

「はああ！！」

メリッサはランス、『ロングダスク』をゲリョスの腹部目掛け勢いよく突いた。

グウウウウ・・・。

ゲリョスは小さく唸った。が、ゲリョスはメリッサには目もくれず、リオンに飛び掛かった。

「うお！！」

リオンは反射的に右に跳んだ。ゲリョスはリオンについばみ攻撃を仕掛けようとしていたようだ。リオンは間一髪でゲリョスの攻撃を避けた。

ゲリョスはリオンへの攻撃を止めると、１８０度回転した。残る二人へ攻撃しようとしたのだろう。だが、その瞬間。

「ふっ！！！」

振り返った瞬間を狙い、メリッサはゲリョスのトサカ目掛け突きを放った。ゲリョスは不意をつかれ、のけ反る。しかし鉄に近い成分でできているトサカには、小さな傷ができただけだった。

「くっ！！やっぱり固い！！」

メリッサは合計三回突きを放つと、バックステップを数回し、ゲリョスと距離をとる。しかしメリッサは巨大な盾に巨大な槍を構えているので、その分重量があり、バックステップしてもまだ、ゲリョスの攻撃範囲内だった。

ゲリョスは離れるメリッサを狙い、一歩踏み込んで距離を一気に縮めると、その勢いのまま、ついばみ攻撃をした。

「くっ！！」

メリッサは巨大な盾を使い、ガードした。しかしゲリョスは連続して頭を振り、攻撃を続けた。

その連続攻撃で、メリッサをガードしていた盾が弾かれ、メリッサの体がむき出しになった。

ドスッ！！

鈍い音がし、同時にメリッサは後方に数メートル吹き飛ばされた。

「おのれ！！」

ハーシェルはメリッサが吹き飛ばされるのと同時に引き絞っていた

弓矢を放った。

ドドドドン！！！

五本の内、四本がゲリョスに突き刺さり、爆発を起こした。

通常、ガンナーは離れた位置に立ち、モンスターの回りに仲間がいない時に攻撃する。これは流れ弾が仲間に当たらないようにするためだ。どんなに熟練したガンナーでも、仲間に当てない保障は出来ないのだ。

ゲリョスはハーシェルに狙いを変え、両翼を広げ、二本の足で走りだした。

「俺を忘れるな！！」

瞬間、リオンがゲリョスの尻尾に斬りかかった。

グワアアアウ！！！

大量の出血と共に、ゲリョスが悲鳴を上げ、怯んだ。

（こいつ、尻尾が弱点なのか！）

リオンはそう悟り、続けて尻尾を斬りつける。

カチャン！

突如、金属を打ち合わせたような音がした。

（ん？なんだ？）

「リオン、目を塞げ！！」

ハーシェルの声が聴こえた。リオンはゲリョスの頭部を見た。

よく見るとトサカを打ち付けている。

「まさか！！」

リオンが叫んだ瞬間、ゲリョスの頭部から強烈な閃光が放たれた。

リオンは咄嗟に目を瞑（つむ）った。だが。

（頭がくらくらする。目を瞑っただけじゃ駄目か！）

リオンは動けなくなっていた。メリッサ、ハーシェルは視界を保っていたが、衝撃波の影響で体が言うことをきかない。

グアアアウ！！！

ゲリョスの鳴き声と共に、リオンは何かを感じた。

（なんだ！？）

しばらくしてリオンの視界が回復した。リオンは自分自身を見た。

紫色の液体が防具を染めていた。と同時に、強烈な吐き気に襲われた。

「リオン、解毒薬を飲んで！！ゲリョスは私たちが引き付ける！！」

メリッサの声で、リオンは悟った。自分はゲリョスの猛毒を含むブレスをくらったのだと。

現在ゲリョスはメリッサやハーシェルのところに行き、交戦中だった。リオンは体に鞭をうち、ポーチから解毒薬をとりだし、一気に飲んだ。数秒後、あの強烈な吐き気が無くなった。リオンは直ぐに立ち上がり、ゲリョスに向かって走り出した。そして。

「お返しだあああ！！！」

リオンはゲリョスの尻尾に斬りかかった。

グワアアアウ！！！

メリッサとハーシェルへの攻撃で夢中だったゲリョスはリオンの接近に気づかず、攻撃をまともにくらい、悲鳴を上げた。

「はあああ！！！」

ゲリョスが怯むのと同時に、メリッサはトサカ目掛け、連続して突きを放った。

「今だ！！」

ハーシェルはゲリョスの右側から弓矢を放った。その全てがゲリョスに当たった。あらかじめ接近して放てば、弓矢の拡散範囲は少なくなり、標的に当たりやすくなる。

「どうだ！！」

リオンはとどめとばかりに血で染まっている尻尾を渾身の力で斬りつけた。

グアアアアアアアウ！！！！

瞬間、ゲリョスは絶叫と共に小さく跳び跳ねた。

（なんだ！？）

リオンはゲリョスの行動が理解できなかった。だが、跳び跳ねると同時にゲリョスに纏う空気が変わったことは分かった。

（こいつ、まさか！！）

リオンが何かを思った、その刹那。ゲリョスは尻尾を振り回した。

「ぐおおお！！」

リオンはまともにくらい、吹き飛ばされた。その威力は、戦いが始まった直後にくらった尻尾の回転攻撃の威力の数倍上がっていた。

リオンは吹き飛ばされた時、太刀を離してしまった。太刀は地面に当たり、音をたてた。

リオンはしばらくして、苦しそうにゲリョスを見た。その瞬間、見てしまった。

「あ・・・」

ゲリョスの充血した両目。口からもれる猛毒液。そして放たれる強烈な殺気。ゲリョスがキレた証拠だ。

リオンの足は震えていた。今までモンスターのキレる様子を見ても、なんともなかった。が、それは誤魔化していたのだ。戦いを恐れ、逃げようとする、内なる心を。

今のリオンは、ハンターではなく、モンスターを恐れ、助けを求める一人の赤子となっていた。

ゲリョスが闘争心むき出しにリオンに突進してきた。

「うあ・・・」

リオンは動けなかった。否、動こうとはした。だが、体がそれを許さなかった。ゲリョスとの距離が数メートルとなった、その時。

リオンの体が動いた。否、動かされたと言った方が正しいか。

自分にぶつかる別の衝撃のおかげで、ゲリョスの突進の範囲から逃れることが出来た。自分を動かしたのは、別の人間だった。その人は、リオンの変わりにゲリョスの突進をまともにうけた。

「メリッサさん！！」

ハーシェルが叫んだ。リオンも、自分を助けた人が誰なのか気づいた。

「うあっ！！」

メリッサは吹き飛ばされた。その先には洞窟があった。
状況は最悪だった。メリッサは洞窟の固い壁に激突した。そして地面に崩れ落ちた。
グアアアウ！！！
ゲリョスは怒りに任せ、倒れたメリッサに向かって猛毒の液体を吐き出した。
「うう・・・」
メリッサは猛毒の液体を浴びた。ゲリョスは直後に、回転して尻尾を振り回した。
「くそおおお！！」
ハーシェルは叫ぶと同時に、弓矢を手にとった。
だが当然間に合うわけもなく、メリッサの体は再び宙を舞い、洞窟の外壁に激突した。その様子を、リオンは凝視していたが、未だに立つことができなかった。
「うおおお！！！」
ハーシェルは弓矢を放った。
グワアアアウ！！！

ゲリョスは激痛にたまらず仰け反る。

「リオン、立て！！退却するぞ！！！」

ハーシェルが叫んだ。その声で、リオンは我に帰った。

リオンはよろめきながら立ち上がり、太刀を手に取り、鞘におさめた。

一方、ゲリョスは攻撃対象をハーシェルに変え、怒涛の攻撃を行っていた。ハーシェルはその攻撃をなんとか避けていた。

「メリッサ！！」

リオンはメリッサのもとに駆け寄った。

メリッサは気を失っていた。防具の隙間から出血し、猛毒の影響で顔が青ざめていた。

「メリッサは気を失っている！！」

「仕方ない！洞窟の中に入るぞ！！メリッサさんを運べ！！」

「分かった！！」

リオンはメリッサを背負おうとする。メリッサの背には巨大な槍が背負ってあったが、リオンは、メリッサを助ける、という一心で力を振り絞った。

瞬間、リオンは全身のリミッターが解除されたような感覚を覚えた。

いわゆる火事場の馬鹿力というものである。

リオンはメリッサを槍ごと背負い、更に盾も右手で持ち、一歩一歩、確実に洞窟の入り口に向かう。

そんな様子に気づいたゲリョスは逃がさないとばかりに、トサカを打ち合わせた。

「させるかよ！！」

ハーシェルの渾身の力で弦を引き絞り、弓矢を放った。

数本の弓矢がゲリョスの頭部で爆発した。たまらずゲリョスは打ち合わせるのを止め、怯んだ。

その隙にリオンは洞窟の入り口に到達し、そして中に入っていった。それを見たハーシェルは弓をしまうと、急いで洞窟の入り口に向かって走り出した。

グアアアウ！！！

ゲリョスは逃げるハーシェルに向かって突進してきた。

徐々に距離が縮まる。だが、女神が微笑んだのはハーシェルの方だった。ハーシェルは洞窟の入り口近くで跳んだ。ハーシェルの体が洞窟に入り、足が入るか入らないかのところで、ゲリョスの頭部は追い付いた。

ドオオオオン！！！

洞窟の外壁はゲリョスの侵入を拒んだ。爆音が響き、ゲリョスは戦場に、ただ一体、取り残された。

グアアアアアアアアウ！！！！！！

獲物を逃がした怒りを押さえられず、ゲリョスは叫び声を上げた。

その声は、このヒジュラ沼地の四方三里まで響いた・・・。

第八話【Ｐｏｉｓｏｎ　ｓｗａｍｐ】（後書き）

サブタイトルの意味は【毒沼地】という意味です。果たして文法的にこれで合っているかは分かりませんが・・・。今回話が長くなったので、更新が遅くなりました。すみません。さて、次回はゲリョス戦の後半です。これからも宜しくお願いいたします。

第九話【Ｄｅｔｏｘｉｆｉｃａｔｉｏｎ】

ヒジュラ沼地にある巨大な洞窟。

グアアアアアアアウ！！！！

外からのゲリョスの咆哮が洞窟内で響く中、リオンは背負ったメリッサを優しく降ろし、地に横たわらせた。

「大丈夫か、メリッサ！！」

リオンはメリッサの顔を優しく叩くが、反応は無かった。

「毒をくらったんだ。早く解毒薬を飲ませろ！」

そこに遅れてハーシェルがやって来た。

「あ、ああ」

リオンはポーチから解毒薬を取りだし、それをメリッサの口に近づけた。

メリッサの意識はないので、リオンは解毒薬を少々強引に飲ませた。その様子を見ていたハーシェルは、続けてメリッサに近づくと、回復薬グレートを飲ませた。

次第にメリッサの顔色が良くなり、安定した呼吸を始めた。

「とりあえず、メリッサさんは大丈夫だな」

ハーシェルは安心した様子を見せた。だがリオンは何か思い詰めているようだ。

「リオン。何があったんだ？」

リオンはハーシェルの質問に、何も言わず、うつむいた。

「ゲリョスの突進。怒り状態だからスピードはあったが、それでも普段のお前は回避行動をとるはずだ。だがあの時、ただ突っ立っているだけだった。どうしたんだ？」

しばらくして、リオンは重い口を開けた。

「あの時、怒り狂ったゲリョスの目を見た。とたんに、体が動かなくなった。頭では避けろと思っているのに、体がそれを許さなかった」

「つまり、ゲリョスに畏怖したんだな」

ハーシェルの言葉に、リオンは返す言葉が見つからなかった。

「怖いと思うことは悪いことじゃない。それは自分の命の危険を知らせる人間の本能だからね。だから僕は怖がるな、とは言わない。だけどそれに打ち勝つ心も、ハンターには必要なんだよ」

「うん・・・。俺は、弱いのかな？」

「そんなことは言っていない。君は今までモンスターに畏怖することなく戦っていた。だから、この本能に気づかなかったんだ」

「だけど・・・それに気づかなかったから、メリッサを傷つけてしまった。なあ、ハーシェル、教えてくれ！俺はどうしたら、克服できる！？」

リオンはハーシェルにすがるかのように言った。ハーシェルはしばらくして、うつむきながら答えた。

「それは僕にもわからない。実際僕も、あの怒り状態のゲリョスの目を見た時、怖いと思ったからね。もしかしたら怖さを克服することは、僕らが人間である限り、決してできないことなんじゃないかな？」

「そんな・・・」

「だけど、本能が怖いと知らせても、心が揺るがなければ、僕は大丈夫だと思う」

ハーシェルの言葉を聞き、リオンは顔を上げた。

「それって、どういうことなんだ？」

「う～ん・・・。例えば、自分に合った覚悟や信念を持つことが大切じゃないかな？」

「覚悟や信念、か・・・」

リオンが言った、その時。

「ううん・・・」

突如、小さな声が聞こえた。リオンとハーシェルは、直ぐにその声の主が分かった。

「メリッサ！！」

「メリッサさん！！」

リオンとハーシェルはメリッサに駆け寄る。メリッサは二人の声に答えるように、ゆっくりと目を開いた。

「ここは・・・？」

「洞窟の中だよ。君はリオンを助けようとして、ゲリョスの攻撃を受けて気絶したんだ」

「そう・・・リオンは、無事？」

「大丈夫。大した怪我を負ってないよ」

「そう、良かった・・・。ごめんなさい、迷惑かけて・・・」

メリッサはリオンを見つけると、一言謝った。

「謝んないでくれよ！元は全て俺が悪いんだ！！」

「そんなことないよ・・・私たち、仲間でしょ？」

メリッサが微笑んだ。

（俺は・・・守ってくれたメリッサやハーシェルに、何もしてやれないのか!?）

リオンは自分が情けなかった。リオンは拳を強く握り、歯を噛みしめた。そして。

「すまん、みんな。一人にしてくれないか？」

「え・・・？どうしたの？」

突然のリオンの言葉に、メリッサは驚いた。

「一人で、考えたいことがあるんだ」

「リオン・・・。分かった。メリッサさんは僕に任せろ」

「ああ。頼む」

リオンは言うと、洞窟の奥に向かって歩いていき、しばらくしてメリッサとハーシェルの視界から消えた。

「何があったの？」

「あいつは今、ハンターなら誰もがぶち当たる壁の前に立っている。この壁を壊せるかは、あいつしだいだ」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

幾つもの灰水晶が輝く、ヒジュラ沼地の洞窟の奥地。ここには昆虫種のカンタロスがいるだけだった。

「はあ・・・」

ここに来たリオンは大きく息を吐いた。

（一人になったは良いものの・・・。覚悟や信念、か・・・。俺に必要なものは・・・）

リオンは自問自答を始めた。だが、考えても答えはしっくりこないでいた。

「ああっ！！自分が情けねえよ！！」

リオンは苛立ち、叫んだ。と、その時。

「いっつ！！！」

突如、リオンの足に痛みが走った。視線を足元にやると、一匹のカンタロスが、その鋭い角を使い、リオンの片足に突き刺そうとしていた。

「こんの野郎！！！」

リオンに無性に腹がたった。まるで悩む自分を蔑(さげす)んでいる様に感じた。リオンは直ぐ様太刀を抜刀すると、その勢いを殺さずに、太刀をカンタロス目掛け振り下ろした。

グシャアアア！！！

攻撃を受けたカンタロスの体は粉々に砕け、跡形も無くなった。

「邪魔すんじゃねえよ！！」

リオンが叫んだ。その後リオンは周りを見渡した。

周りには数えると四体のカンタロスがリオンを見ていた。その内二体はリオンに畏(おそ)れをなしたのか、後退りをしていた。

（逃げるのか？まあそりゃそうだろうな。束になっても俺に勝てる訳無いからな。だけど・・・）

リオンは後退りするカンタロスを見て、何か自分に似ていると感じた。

（ゲリョスに睨まれた俺は、まるでこのカンタロスのようだったな・・・。勝てない、怖いと思って、戦闘を放棄して逃げようとする心を、俺は止められなかった。何か確固たる決意があれば、それを引き留めることが出来るのか？）

リオンがそう思った時、カンタロスは突如四体一斉に飛び跳ね、リオンに攻撃を始めた。

「んっ！！」

リオンは攻撃を避けると、カンタロスたちと距離をとった。

（恐怖心を打ち払い、攻撃してきたか。俺は、こう在りたいのか？死の危険を犯しても、仲間を信じて最後まで戦い抜く、鋼の精神を、俺は欲しているのか？）

カンタロスはリオンを距離を縮めると、一斉に飛び跳ね、攻撃を再開した。

（殺らなければ、自分が殺られる。俺は、いや、ハンターもモンスターも、それは分かっている）

リオンはカンタロスたちに次々と斬りかかり、一分もしないうちに残るは一体となった。

「逃げてもいいぞ？」

リオンは残ったカンタロスに向かって言った。たとえそれが通じない相手だと分かっていても、リオンは言いたかったのだ。

案の定、カンタロスはリオンに飛びかかった。

「ふん！！」

リオンは太刀を一閃させた。カンタロスの体は粉々に砕けちった。

「はあ、はあ・・・」

リオンは考えながらの戦闘で、多少息があがった。

「ふう・・・」

数分後、息が落ち着いたリオンは納刀し、カンタロスとの戦闘で感じとったものを整理した。そして、リオンはおもむろに天井を見上げた。

「俺に足りないのは、最後まで諦めずに戦い続ける心、なのかな・・・？」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

リオンがメリッサ、ハーシェルと離れてから約1時間がたった。

ハーシェルはリオンの帰りを待ちながら、メリッサの様子を見守り続けていた。

「リオンのやつ、遅いですね。待ってるこっちの身にもなってもらいたいよ」

「仕方ないわ。それだけ悩んでいる証拠よ」

メリッサはもう立ち上がり一通りの行動がとれるまで回復した。

パチャ、パチャ・・・

不意に、水が跳ねる音がした。メリッサとハーシェルは音のする方向を向いた。

「やっと来たか」

ハーシェルが言った。視線の先にはリオンが、こちらに向かって歩いていた。

「もう大丈夫なのか、メリッサ？」

「まだ本調子じゃないけどね。でも戦いに支障はないと思うわ」

「それで、リオン。答えは見つけられたか？」

ハーシェルが言うと、リオンは小さく微笑んだ。

「考えたけど、しっくりくる答えは見つからないな。俺は覚悟とか

信念とか、興味なかったからな。だけどさっき、一つ、心に誓った」

「それは、何だ？」

「単純だけどよ。俺はもう、逃げない。殺らなければ、こっちが殺られる。ハンターとモンスターの戦いは、逃げた方が負ける。だったら俺は、逃げたら俺も仲間も全員死ぬと、心に刻み込む。そうすりゃ、恐怖しても、体は言うことをきくはずだ」

「ふっ、本当に単純だね。でも、実に君らしいよ」

「そうね。でもリオン。逃げるにも、いろいろあるわ。もう戦いたくないから逃げるのと、また戦って勝つために逃げるのは、違う。これから先、強いモンスターと戦って、どうしても逃げないといけない時が来るけど、必ず後者を選択するようにすれば良いのよ」

ハーシェルとメリッサの言葉に、リオンは泣きそうになるのを必死になって堪えた。

「みんな、ありがとう。俺はもう、あんなヘマはしない。約束するよ」

「頼もしいね。私たちも頑張らないとね」

「そうですね」

話しているうちに、三人は自然と笑い始めた・・・。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

その後、三人は洞窟を抜けようと、洞窟の出入口を目指した。今、ハーシェルが洞窟の外を覗きこんでいた。

「もう外は夜ですね。ここにはゲネポスやイーオスはいないようです」

「そう。じゃあ、外に出ましょう」

メリッサの言葉で、リオンは先頭に立ち、洞窟の外に向かった。

やがて現れた、夜の沼地は昼とは全く違っていた。

「なんか、沼の色がおかしくないか？」

「そうか。リオンは夜の沼地は知らなかったな。あの紫色の沼地には毒が含まれている。足を入れるだけで毒を喰らうことになる。気をつけろよ」

「そうよ、リオン。夜の沼地は危険よ。それに私たちは結構ダメージをうけたわ。ここは一旦ベースキャンプに戻ったほうが良いと思うけど？」

「うーん。仕方ないな。とりあえず、ベースキャンプに向かうか」

リオンは言った。実際、リオンはメリッサのことが心配だったのだ。それはハーシェルも同じだった。ハーシェルとリオンはメリッサを気遣いながら、ベースキャンプに向かった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

リオンは物陰に隠れて立ち止まった。ここは地図でエリア5と書かれた場所で、昼に飛翔するゲリョスを発見したところである。

リオンの視線の先には、五体のイーオスが立っていた。

「イーオスか。結構手強い相手だな。だがここを通らないとベースキャンプに行けない。倒すぞ！！」

リオンは言うと、物陰から飛び出した。メリッサ、ハーシェルもリオンに続いて飛び出した。

イーオスは三人に気付くと、迎撃体制になり、迎え撃った。

リオンは何かが吹っ切れたようだった。怒涛の攻撃を見せ、ほとんどのイーオスを倒していった。

「まるで鬼だな」

ハーシェルは一体のイーオスを倒すと、リオンの様子を見て思わず呟いた。

一方、メリッサは怪我の影響からか、昼とはうって変わって動きが鈍く、ハーシェルの援護を受けて一体のイーオスを倒しただけだった。

「やっぱり、メリッサさんは休んだほうが良いですね。早くベースキャンプに向かいましょう」

ハーシェルの言葉で、リオン、メリッサは頷き、ベースキャンプに向かって歩き出した。

バシャアアアアアン！！！！

突如、後方から大量の水が弾ける轟音が鳴った。それと同時に自分たちに向けられる強烈な殺気を感じた。

（まさか・・・）

リオンは最悪の事態を想像した。そして、恐る恐る振り返った。

まず最初にメリッサ、ハーシェルが見えた。その後、二人の先に巨大な物体を見つけた。

自分に恐怖を植え付け、心の中で葛藤させる原因を造ったモンスター。

「ゲリョスだ！！！」

ハーシェルが叫んだ。ゲリョスは、怒り状態ではなかったが、まるで待ちわびたと言わんばかりの、威嚇行動をした。

「くっ！！この沼地では落とし穴は使えない！。そしてゲリョスにはシビレ罠と閃光玉はきかない！。こんな状況で逃げるのは難しいですね！！」

ハーシェルは動揺していた。ゲリョスは走りだすと脅威のスタミナでハンターを追い詰めるのだ。

「やるしかねえだろ」

突然、リオンが言った。メリッサとハーシェルはリオンの方を向いた。

「逃げれないなら、立ち向かうしかねえ！！ここで奴を倒せばいいだけだ！！！」

リオンは直ぐ様抜刀し、臨戦体制になった。

「仕方ないね。覚悟を決めなきゃ」

「そうですね。でもメリッサさん。無理しないでください」

「分かっているわよ」

「よし！。じゃあ、再戦といくか！！」

リオンが叫ぶと同時に、ゲリョスが走りだした。死闘が、再び始まった・・・。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ゲリョスの突進。狙われたのはリオンだった。おそらくゲリョスは昼の戦いで、このメンバーの中でリオンが一番弱いと思ったのだろう。だがリオンは冷静に、ゲリョスの突進を横っ飛びで避けた。

ゲリョスは避けられると急停止し、再びリオンを狙おうと後方に振り返った。

「うおりゃあああ！！」

しかしゲリョスがリオンを見つけた時には、リオンは『鉄刀【神楽】』を振りかざし、ゲリョスのトサカ目掛けて振り下ろした。

グウウウウウ・・・

強烈な一撃で、ゲリョスは低く唸った。リオンはトサカを見ると、斬ったところが欠けていた。

（昼の戦いで、トサカは脆くなっているか！）

昼の戦いは、確実にゲリョスにダメージを蓄積させていることを理解したリオンは、ゲリョスの足元に潜り込み、太刀を斬りつける。

グアアアアアウ！！！

ゲリョスはリオンを踏み潰そうと、その場で跳躍した。

リオンは急いでゲリョスから離れ、距離をとる。

「僕を忘れるなよ！！」

リオンが離れたのを見ると、ハーシェルはあらかじめ引き絞っていた五本の弓矢を放った。

ドオオオォォォォォン！！

火属性を帯びた弓矢がゲリョスの全身に当たり、爆発した。たまらずゲリョスはのけ反る。

「隙あり！！」

「はあああああ！！！」

無防備になった、弱点である尻尾を狙い、尻尾を挟んで、左からリ

オン、右からメリッサが同時に攻撃を仕掛けた。

ブシャアアアアアァァァァ！！！！

大量の血液が尻尾から吹き出し、ゲリョスが天を向いた。

（やったか！？）

リオンは手応えを感じた。だがその思惑は見事に外れた。

グアアアアアアァァァウ！！！！

突如ゲリョスは大声を出すと、その場で飛び跳ねた。

「えっ！？もうキレたの！？」

ゲリョスの予期せぬ行動に、メリッサが驚きの声をあげた。

モンスターは命の危険を感じとると、生きるために相手を何としても殺す、という本能を剥き出しにして戦う、いわゆる怒り状態になる。それは、体力が減るにつれて、通常の状態から怒り状態になるペースが早まるのだ。

このゲリョスの行動は、リオンたちに、危機をもたらすと同時に、ゲリョスは確実に弱っていると教えてしまった。

とはいえ、ここからはゲリョスの猛攻がリオンたちに襲いかかる。そのことを分かっているメリッサは直ぐにゲリョスから離れる。

だがその時、メリッサはリオンの異変に気づいた。

「リオン！？」

リオンは飛び跳ねるゲリョスの尻尾の近くに立ち、ゲリョスを見つめたまま動かない。メリッサに、昼の戦いの時の悪夢が蘇る。

案の定、怒り狂うゲリョスが振り返り、リオンの方を向いた。

「いかん！！」

ハーシェルも突っ立っているリオンに気づいた。ハーシェルは急いで弓矢を引き絞り、矢を放つ。

弓矢はゲリョスに当たった。が、ゲリョスは止まらない。

「避けて、リオン！！」

メリッサが叫ぶ。それと同時に、ゲリョスがリオンに向かって口から猛毒の液体を吐き出した。

「ふっ！！！」

突如、声が聴こえた。リオンは跳躍し、ゲリョスに向かって跳んだ。その一歩で液体を避けると、前のめりに倒れる勢いで太刀を振り下ろした。

キイイィィィィン！！

と高音が響いた。リオンの太刀はゲリョスのトサカに当たったようだ。ゲリョスは不意をつかれ、立ち尽くす。その隙にリオンは直ぐ

に立ち上がると、足元を抜け、ゲリョスから離れた。

「やれやれ。ヒヤッとしたよ」

「本当よ、リオン。なんで動かなかったのよ？」

「悪い、みんな。恐怖を押し殺すのに時間がかかってな。でも、もう心は揺るがないさ」

リオンは言うと笑い出した。それを見てメリッサ、ハーシェルも微笑んだ。

グアアアアアァァァウ！！！

怒りに燃えるゲリョスは叫ぶと、メリッサに毒液を吐き出しながら突進してきた。

「はっ！！」

メリッサは急いで突進を横っ飛びして避ける。するとゲリョスは避けられたのはお構い無しに辺りを爆走し始めた。

「狂い始めたか！」

リオンはゲリョスの行動が理解できずにいた。その間ゲリョスは狂ったように爆走していたが、リオンたちとだいぶ離れたところで急停止すると、突如リオンたちの方を向き、突進してきた。

リオンとメリッサは近くにいた。リオンは直ぐに走りだした。メリッサも、リオンとは逆方向に走りだそうとした。

「あっ！？」

突如、メリッサは体勢を崩し、その場で転んでしまった。昼の戦いの時にうけたダメージが、足に体重をかけた時にあらわになってしまったようた。

「メリッサさん！！」

メリッサの転倒を離れたところで見たハーシェルが叫んだ。その間にゲリョスの巨体がメリッサに迫る。メリッサは反射的に手に持っていた盾で体を覆った。

「ぐっ！！！」

ゲリョスの巨大な足がメリッサの盾を蹴り飛ばし、メリッサの体は宙を舞い、１０メートルは吹き飛ばされたところで地面に落ちた。

「くそがあああぁぁぁぁぁ！！！」

リオンは激昂し、停止したゲリョスの尻尾に渾身の力を込めて太刀を振り下ろした。

グアアアアアウ！！！

血液が大量に吹き出し、ゲリョスはのけ反った。ゲリョスの尻尾は、大量の血液で赤黒くなっていた。

ゲリョスは激痛をこらえると、再び前を見る。するとゲリョスの目の前に、弓矢を引き絞るハーシェルがいた。

「そのトサカ、破壊するよ」

ハーシェルは限界まで引き絞った弓矢を放った。

バアアアアアアアン！！！

弓矢がゲリョスの頭部に直撃し、爆発した。煙が晴れ、ゲリョスのトサカはハーシェルの予告通り、傷だらけになり、所々が大きく欠けていた。これではもうトサカを打ち付けても閃光を発するのは難しいだろう。

「よし！。トサカを破壊したぞ！！」

手応えを感じ、ハーシェルは言った。これでゲリョスの攻撃力は半減したと言ってもいいだろう。

一方、リオンはゲリョスがハーシェルの攻撃に晒(さら)されている間に、倒れているメリッサに駆け寄った。

「大丈夫か、メリッサ！？」

リオンが言うと、メリッサは巨大な盾をずらし、顔を出した。

「大丈夫。大した怪我は無いわ」

メリッサは立ち上がると、ポーチから回復薬を取りだし、それを一気に飲んだ。

「トサカの壊れたゲリョスの討伐は簡単よ。とっとと片付けましょ

！！」

メリッサが力強く言うと、ゲリョスに向かって走っていった。

グウウウウウ！！

ゲリョスはトサカが破壊させたのを知ると、込み上げてくる怒りに任せて行動するのを止め、正気に戻った。そして向かってくるメリッサを見ると、突然羽ばたき始めた。

「こいつ、逃げる気だ！！」

リオンが言った時、ゲリョスの巨体は宙を舞い、次第に上昇していく。この行動はおそらく、このままでは本当に死ぬと本能が告げたためであろう。モンスターとて最優先するのは、逃げてでも生きるという純粋な思いなのだ。

「逃げるのは、美しくないねぇ～」

ハーシェルは、ゲリョスが羽ばたき始めた時、直ぐに弓矢を取りだし、引き絞っていた。そしてゲリョスが飛んだ時、ハーシェルは弓矢を放った。

グアアアアアァァァウ！！！

弓矢は右翼に当たり、爆発した。片翼が攻撃に合い、体制を崩した。ゲリョスは体制を立て直すことが出来ず、落下した。

墜落したゲリョスはバタバタともがいていた。

「はあああああ！！！」

メリッサはその間にゲリョスに近付くと、ゲリョスの腹部に『ロングタスク』で突き攻撃した。

ゲリョスは苦しそうに立ち上がった。その時には、リオンはゲリョスの背後にいた。

「これで終わりだ！。気刃斬り！！！」

リオンはゲリョスの尻尾目掛け、溜めていた錬気を解放した。『鉄刀【神楽】』の刀身に赤いオーラが纏い、連続攻撃をゲリョスに放つ。

ゲリョスは逃げようとしたが、メリッサとハーシェルの攻撃によって、なかなか動くことが出来ずにいた。

「うおおおお！！！」

リオンは血だらけの尻尾に向かい、気刃斬りの最後の攻撃である、高く構え、赤いオーラを纏った太刀を振り下ろした。

ブシャアアアア！！！

ゴム質の尻尾は、攻撃を受けた部分を境に切断され、そこから大量の血が噴き出す。

グアアアウ・・・

リオンの一撃で、ゲリョスはよろめき始め、そして。

ドオオオン！！

地響きを鳴らし、ゲリョスが倒れた。ゲリョスは小さく鳴くと、顔を地面に付け、動かなくなった。

「死んだのか・・・？」

「油断しないで、リオン。ゲリョスは死んだと見せかけてハンターの油断を誘って、突然攻撃してくることもあるわ」

ゲリョスに近付こうとするリオンを、メリッサは止めた。

「いや、これは・・・。本当に死んでいるのかも・・・」

ゲリョスを観察したハーシェルが言った。そしてハーシェルは試しに弓矢を取りだし、弦を引き絞り、放った。

拡散した弓矢はゲリョスの全身のあちこちで爆発した。だが、苦手な火属性を帯びた弓矢をくらっても、ゲリョスは何一つ反応しなかった。

「ははっ。死んだフリもせずに死ぬなんて・・・。リオンの一撃は本当に凄まじかったんだな」

ハーシェルが呆れたように息を吐きながら言った。

「まあ良かったじゃないか。これで討伐完了だ。ささ、剥ぎ取ろうぜ」

「全く・・・。その馬鹿力はどこから来るのか知りたいわ・・・」

メリッサもハーシェルと同じように呆れた様子だった。リオンはそんな二人の様子に全く気付かず、ゲリョスの体から素材になりそうなものを剥ぎ取っていた。

こうして、ヒジュラ沼地の激戦は終わった。この戦いで、リオンは挫折を味わい、それに打ち勝ったことで、ハンターとして、また人間としても成長した。

数時間後、リオンたちは沼地を後にした。やがて、この沼地を朝日が照らし出した。雨ばかり降る沼地には珍しい光景だ。ゲリョスの毒も、沼地の毒も、綺麗に解毒されたことを、この朝日は報せているのだろうか・・・。

第九話【Ｄｅｔｏｘｉｆｉｃａｔｉｏｎ】（後書き）

サブタイトルの意味は【解毒】です。長い英単語でびっくりしました。さて、この第九話は、なんと約１万文字あります。僕自身、一話でこんなに書いたことはありませんでした。しかし相変わらず戦闘描写は短いですね。もっと長く書けるようにしないと！！

第十話【Justice】

ドンドルマに帰還したリオン、メリッサ、ハーシェルは意気揚々と集会所におもむき、受け付けをしているジェニファーのもとに向かった。

「ゲリョス、討伐したぜ」

リオンはジェニファーの前に立つと、沼地から持ち帰ったゲリョスの群青色の皮を見せた。

「あら、リオン君！。討伐してくれたのね！。本当にありがとう！！」

「いえいえ。これくらい、容易（たやす）いことですよ。それにしても、ジェニファーさんの、その喜びに満ちた笑顔！！。まさに蒼海に降り注ぐ太陽のようだ！！！」

「うるせえぞ、ハーシェル！。てめえは黙ってろ！！」

自分の世界に入っているハーシェルを見て、たまらずリオンが一喝した。その様子を見て、メリッサはジェニファーはクスクスと笑った。

「みんな、ありがとね。さて、報酬を用意するから、ちょっと待ってて」

ジェニファーは言うと、受け付けの奥に消えた。そして数分後、ゼニーの入った袋を抱えたジェニファーが現れた。

「今回のゲリョス討伐の報酬金、６０００ゼニーです」

ジェニファーは受け付けの台に袋を置いた。

「えっ！？。６０００ゼニーもですか！？。ちょっと多くないですか？」

額の多さにびっくりしたリオンが言った。

「確かにね。普通なら５０００ゼニーが妥当だわ。でも私の友人は、あなたたちにとっても感謝してるわ。だから、私の独断で額を多くしたのよ。でも上の人には内緒にしといてね」

「そうですか。じゃあ、お言葉に甘えて、頂きますね」

メリッサは言うと、直ぐに袋を手に取った。そして三人は袋の中のゼニーを均等に分けると、集会所を後にした。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ドンドルマに夜が訪れた。リオンは一人、自宅の窓越しに夜空を見

つめていた。

「いろいろあったな～。まさか俺にあんな欠点があったなんてよぉ。師匠も気付いていたはずなのに、何も言わないんだから、ひどい人だなぁ」

リオンは、沼地での戦いを振り返っていた。

「でもまあ、自分に足りないものも見つけられたから、良しとするか」

リオン自身、ゲリョスとの戦闘で揺るがぬ心を手に入れることができ、ハンターとして一段階成長したと感じていた。リオンは夜空を見つめ、今だに帰らないカナハルを思い、呟いた。

「師匠・・・。師匠の言った通りだよ。ハンターって、本当に面白いな。俺、これからも頑張れるよ」

リオンはそう言い残した。

昔の記憶が無く、右も左も分からない自分をハンターの道へ導いてくれたジェニファーを始め、ドンドルマの街で出会った様々な人。そして自分を弟子にし、ハンターの面白さを教えてくれた、カナハル。

リオンは出会った人たちに感謝すると、窓から離れ、しばらくして眠りについた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

それから数日間は、三人とも思い思いの自由行動をとった。戦いの後は普通、鍛冶屋に行き、武器を修理してもらったり、負った傷を癒したりするものだろう。それは三人にとっても例外ではない。

リオンは近場の狩場に赴(おもむ)き、鉱石を採取した。おかげでかなりの数が集まった。鉱石類は武器や防具の素材になるので、あるに越したことはないのだ。

そしてドンドルマへの帰還から一週間後。三人は久しぶりに集会所に集まった。相変わらず集会所の中はハンターたちの活気であふれていた。

「さて、これからどうしようか？」

三人が真ん中のテーブルを囲うようにして椅子に座った後、リオンが言った。

「そうね。そろそろ依頼をこなして報酬金を貰わないといけないわね。まず依頼を探しましょ」

「そうしたいですけど・・・。今日は一段とハンターの数が多いですね。まあ飲んだくれのいかついハンターばかりですけど」

ハーシェルが苦笑しながら言った。リオンは同感だと思った。

いつにも増してハンターの怒号が響き、こちらの会話も近くで集中して聞かないとわからないほどであった。こういう飲んだくれたちが集まる集会所は質(たち)が悪いので、静かに出ていくのが一番良いのかもしれない。事実、リオンたちの周りに若いハンターは一人もいないようだ。

「皆さん、静かにしてください！！！！」

突如、女性の大声が集会所全体に響いた。ハンターたちは驚き、一斉に口を閉ざした。

「ただいま、緊急の依頼が入りました。皆さん、静かに聞いてください」

声の主は受け付けをしているジェニファーだった。ハンター全員がジェニファーを注目した。

「現在、カーライル砂漠で行商人の部隊がダイミョウザザミに襲撃されたもよう！。伝令のかたが、このドンドルマに救援要請を届けました！。誰か、カーライル砂漠に向かって救援してくれませんか！！」

ジェニファーがハンターを見渡しながら言った。しばらく沈黙が続いた。

「なあ、どうする？」

リオンが小声でメリッサとハーシェルに聴いた。二人は考えこんでいたので、しばらくはリオンの問いに、何も言わなかった。

「おいおい、受け付けさん！！その行商人ってのは、ハンターを雇わなかったのか？」

沈黙を破り、ある一人のハンターが言った。顔が赤くなっていたので、リオンは直ぐに飲んだくれのハンターだと分かった。

「一応、ハンターを二人雇ったらしいのですが、その二人は流れのハンターだったらしいのです。伝令の方の情報によると、二人は形勢不利と見るや直ぐ様逃走したようです」

「マジかよ。酷い話しだな」

ジェニファーの説明を聞き、たまらずリオンが呟いた。

この世界のハンターは、大きくわけると三つに分かれる。

ドンドルマ等の巨大な街のハンターズギルドに登録されたハンター。村のギルドに登録され、村の発展のために尽力することを目的とするハンター。そして、そのどちらにも属さず、ギルドに縛られず、自由に依頼をこなすハンター、この三つである。一番多いのが最初にあげたハンターであり、リオン、メリッサ、ハーシェルも、この中に入る。

今回問題となった『流れのハンター』とは、最後にあげたハンターを指す。彼らはギルドに縛られない。ゆえに依頼を放棄しても罰則は無い。

本来、ギルドに登録されたハンターは依頼を放棄すると、何らかの罰則が与えられ、更に信頼度も失う。信頼が失われたハンターは簡単な依頼しか受けられない。だからギルドに登録されたハンターは

ギルドの罰と、その先に待つ、信頼回復という名の地獄が待っているため、余程のことがない限り依頼を放棄することがない。

しかし流れのハンターは罰則を恐れる必要がない。だから今回のような問題が起こるのだ。

「はっ！そりゃ、お気の毒だな！！まあ行商人の護衛なんてつまらん依頼は、流れのハンターくらいしか受けんだろうしな！！」

一人のハンターが言うと、飲酒した周りのハンターが、

「げはははは！！！！」

と、ゲラゲラと笑い出した。

「なんだよ、こいつら。人の不幸を笑うのか？」

「仕方ないよ。現実に、行商人の護衛依頼は僕も、あまり受けたくないからね」

怒りに震えるリオンに、ハーシェルが宥(なだ)めるように言った。

行商人の護衛依頼は、モンスターの狩猟依頼とは少々異なる。狩猟依頼では、モンスターを討伐さえすれば依頼を達成したことになる。対して行商人の護衛依頼では、行商人を目的地まで護衛することが最優先されるので、モンスターに出会わなければ戦わなくてもよい。しかし、仮にモンスターと遭遇して討伐しても、依頼達成とはならず、目的地に着いて初めて依頼達成となる。そのため、長期間にわたり行商人を護らなくてはいけない。

そしてハンターが行商人の護衛依頼を断る、もう一つの理由。それは行商人を護りながらモンスターと戦うのは、ハンターが一番嫌うからだ。もし行商人に傷を負わせてしまえば、最悪報酬金が減額されてしまうのだ。

「そんなこと言わないでください！。誰か、救援に向かってくださいませんか！？」

「ははははは！！。くだらねえな！！。誰が行く、ってんだよ！！！」

ハンターが言うと、周りから、

「そうだそうだ！！」

「行商人なんか死んじまえばいいんだ！！」

と、やじが飛んで来た。

ガタアアアアアァァァァン！！！！

突如轟音が集会所に響いた。周りのハンターは一斉に音を起こした主を見た。

「リオン・・・」

メリッサが呟いた。

音を起こしたのはリオン。リオンは座っていた椅子を蹴り飛ばしたのだ。

リオンは限界だった。これ以上、飲んだくれのハンターたちがジェニファーを笑い者にすることに。

「ジェニファーさん、俺が行きます。直ぐに用意します」

リオンは言うと、集会所の出口に向かって歩き始めた。

「おい！。若造が調子乗んじゃねえぞ！！」

今までジェニファーに突っかかっていたハンターがリオンの前に立った。

「今こうしてる間にも、行商人たちは危険な目に会っているかもしれないんだ！。てめえには人を助けよう、っていう心は無いのか！！」

「なぁんだとぉぉ！！！！！」

飲んだくれのハンターは激昂し、リオンの首に手を伸ばした。

「やめんかあああぁぁ！！！！」

その時、声が響いた。リオンに突っかかったハンターは後ろを向いた。

瞬間、声を発したと思われる男がリオンに突っかかったハンターの肩を右手で勢い良く叩いた。

「全く！。しばらく黙って見ていたが・・・。お前たちの心に、正

義は無いのか！？。俺は情けなく思うぞ！！」

リオンは意味のわからないことを言う男を見ていた。

年は二十代後半と見れる、骨格の良い顔つきに引き締まった筋肉が付いた両腕両脚。短い黒髪をオールバックにまとめる、『クロオビショート』という髪型の男が、そこにいた。

「な、なんだてめえ！？。どこの馬の骨か分かんねえやつが口答えすんじゃねえ！！」

リオンに突っかかったハンターは、突然の男の乱入に動揺したようだが、直ぐに開き直った。

「ふむ、なるほど。では俺の身分を証明するとしよう」

乱入した男は言うと、左手の甲を突きだした。リオンはその甲を見た。

そこには、太陽と思われる球体の中に二つの剣がクロスした入れ墨があった。

「げっ！！。こ、これは『日輪の正義』の紋章！？。ま、まさかお前！？」

「そうだ。俺は猟団『日輪の正義』のメンバー。名は、ゴードン・ファルサロス。さあ、分かったらここから出ていけ！」

自らをゴードンと名乗った男が一喝した。すると。

「やべえぞ！！。『日輪の正義』だ。逃げろ！！殺されるぞ！！」

と、リオンに突っかかった男ばかりか、周りにいた飲んだくれのハンターたちは次々と集会所を飛び出てしまった。

「ふっ。殺されるとは失敬な」

静まりかえった集会所で、ゴードンは苦笑した。

「あ、あの。ゴードン、さん？」

リオンはこの男に言った。さっきのハンターたちの反応から、この男はただ者ではないと思い、思わず敬語を使った。

「おっと、忘れていたぞ。すまなかった、正義心溢れる若者よ」

「はい？」

ゴードンの返答に、リオンは戸惑った。その様子を見て、後ろのテーブルに座っていたメリッサ、ハーシェルはリオンのもとに向かった。

「リオン。この人、なんかおかしいよ・・・」

「君、聞こえているぞ！。君は正義心に溢れる者をおかしいと言うのか！？」

メリッサの一言に素早く反応し、ゴードンが叫んだ。とたんにリオン、メリッサ、さらにはハーシェルまでもが畏縮してしまった。

「ゴードンさん。あまり怒らないでくださいね。こんな調子だと『日輪の正義』のイメージが悪くなりますよ。まあ、今でも悪い方ですが・・・」

「最後の言葉は余計です、ジェニファーさん」

「えっ、ジェニファーさん。この人と知り合いですか？」

ゴードンとジェニファーのやりとりを見て、リオンは気になったことを言った。

「まあ、少しね。ゴードンさんは、ここに訪ねる度(たび)に問題を起こすから・・・」

「問題じゃない！。彼らに正義心を説いているのだ！！」

「全く・・・。あっ、そうだった。リオン君。救援に行く、と言ってくれたけど、本当？」

「え、ええ。そのつもりです。お前ら、良いよな」

リオンは言うと後ろを向き、メリッサ、ハーシェルを見た。

「全く。堂々と宣言しちゃ、受けるしかないじゃない」

「ふっ。君は本当に、やることが分からないよ。でもそのおかげで退屈せずにいられる」

二人は微笑みながら言うと、首を縦に一回振った。

「ほう。君たちは三人編成か。だが今回は救出戦だ。狩猟とは訳が違う。よし・・・。俺も同行しよう！」

「ええっ！！！」

ゴードンの発言に、三人は一斉に声をあげた。だがそんなことはお構い無しに、ゴードンは続けて言った。

「では準備に取りかかろう。敵のダイミョウザザミは閃光玉や落とし穴は効かない。その代わりガード状態の時は音爆弾が効く。それを知っておいてほしい。では一時間後、ここで会おう」

するとゴードンは返答を待たずに集会所を出ていってしまった。

「あ～あ、行っちまったよ。ジェニファーさん。あの人、本当に強いのか？あと、『日輪の正義』って、何ですか？」

リオンは溜め息を吐くと、ジェニファーの方を向いていった。

「そうね・・・。まず『日輪の正義』について説明するわね。皆さんは、このドンドルマに存在する沢山の猟団の中で、最強と称えられている猟団は何か知っていますか？」

「もちろんです。ハンターなら全員知ってますよ。『太陽の樹』ですよね？」

ジェニファーの問いに、メリッサが答えた。

『太陽の樹』。ドンドルマが誇る、エリート中のエリートが集う、一部では歴代最強とも言われる猟団だ。三年前の、『龍王』を名乗

ったスサノオが起こした戦争では一致団結し、最前線で戦い、勝利に貢献した。

「そうよ。でも『太陽の樹』に所属するハンターは、その圧倒的な強さから、常に戦いに追われるため、ドンドルマに留まることはほとんど無いわ。その『太陽の樹』不在時の穴を埋めるために誕生したのが『日輪の正義』よ。最初は小さかったこの猟団も数年後には、『ドンドルマの守護神』の二つ名を持つまでに強大化したわ」

「でも、そんなすごい猟団を、さっきのハンターたちは恐れているようでした。何か訳があるのですか？」

しばらく話を聞いていたハーシェルが質問した。

「ああ、そのことね・・・。あのね、『日輪の正義』には決して揺るがない一つの概念があるの。それは、『正義無き者は人間に有らず』という言葉よ」

「ひっでえ概念だな・・・」

「とにかく。『日輪の正義』のメンバーは、この概念を忠実に守っているの。そのせいで、集会所でさっきのようなハンターたちを見ると必ず正義を問うわ。当然言われたハンターは黙って話は聞かないから、小競り合いが始まる」

「つまり、その小競り合いは必ず『日輪の正義』のメンバーが勝つ。彼らに逆らうと痛い目に合うから逃げる。美しくないね」

ジェニファーの言葉を聞き、ハーシェルは結論を導いた。

どうやら、この小競り合いを繰り返す内に、『日輪の正義』のメンバーは非常に強く、精神がいかれていると認識し、いつしか、逆らえば殺されると囁かれるようになったようだ。

「ゴードンさんはとても強いわ。でも彼の機嫌を損ねると大変な目に合うかもしれないから、気をつけてね」

「はい、わかりました。じゃあ、準備に取りかかります。メリッサ、ハーシェル、行くぞ」

「分かったわ。場所は砂漠だからクーラードリンクを忘れずにね」

「ついでに言うけど、シビレ罠も有効だから持っていきましょう」

三人は決戦の準備を進めるため、集会所を後にした。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

約一時間後。リオンは体を防具で身を包み、太刀を装備したのを確認すると、集会所に入っていった。

「あれ？みんな早いなあ～」

リオンの前方には、既に準備万端といった様子のメリッサ、ハーシェル、そしてゴードンが立っていた。

「これで全員揃ったな。ふむ・・・。君の防具は『クックシリーズ』。そして使用武器は太刀か」

「は、はい。『鉄刀【神楽】』と言います。あの、その防具と武器は・・・？」

リオンはゴードンの、大部分が灰色で所々に青色が光るゴツゴツとしてそうな防具と、真っ黒なガンランスと思われる武器を見て言った。

「ああ。この防具は『バサルUシリーズ』だ。そして武器はガンランスで、『ブラックガンランス』という名前だ」

「えっ！？。バサルUって、上位の防具ですよね？。ということはゴードンさんは上位ハンター！？」

「ああ、そうだが？。真の正義を探して戦っているうちに、いつの間にか上位ハンターに選ばれていたよ」

ゴードンとリオンが言った上位ハンターとは、下位クラス（今までリオンたちが戦ってきたモンスターのクラス）より上のクラスである。上位クラスのモンスターは下位クラスのモンスターとは格段に強力となっており、その分ハンターにはより高い戦闘能力と知識が求められる。

ちなみに約一年前に、その上位の更に上であるGクラスが誕生した。そのGクラスのモンスターを狩るハンターは、この大陸で数十人ほどしかいない。

今ゴードンが身に着けている『バサルUシリーズ』は、火山に生息する上位クラスの岩竜バサルモスの素材で造られた、防御性能に特化した防具である。そして『ブラックガンランス』は、バサルモスが成長し、成体になった鎧竜グラビモスの亜種である、黒いグラビモスの素材で造られるガンランスだ。

「行く前に一つ言っておくが、俺はあくまで行商人の救出及び護衛を優先したい。だからもしダイミョウザザミに遭遇したら、君たち三人で戦ってくれ」

「へっ。俺たちはダイミョウザザミの狩猟に集中しろ、ってか？。でもまあ、その方がいいかもしれないな」

「そうね。私たちは行商人の護衛なんてやったことないから、その方が安全だわ」

「僕も、異論は無いよ」

「よし。では出発しよう。正義の名の元に、行商人を救うのだ！！」

ゴードンが集会所の中で叫んだ。三人は揃って苦笑いした。

こうして、新たなハンター、ゴードンと共に、カーライル砂漠に向かうことになった・・・。

第十話【Ｊｕｓｔｉｃｅ】（後書き）

サブタイトルの意味は【正義】です。最初、サブタイトルは【日輪の正義】にしようと思っていましたが、日輪という意味の英語がなかったため、断念しました。

第十一話【Rescue battle】

ドンドルマからカーライル砂漠までは竜車で二日かかる。竜車に揺られている間、行商人が無事かどうかは確認することが出来ない。

リオン、メリッサ、ハーシェル、そしてドンドルマの猟団『日輪の正義』のメンバーであるゴードンの四人は竜車の中で、救援要請を出した伝令の話を整理しあった。

伝令が行商人と別れたのはカーライル砂漠の中央部に広がる洞窟だという。ダイミョウザザミは主に砂漠地帯を移動するので、現在も洞窟内に隠れている可能性が高い、と結論を出した。

そして、ドンドルマを出発して二日後。ベースキャンプには、竜車から降り、戦闘準備を行っている四人がいた。

「さて、これからどう行動しようか？」

太刀を研ぎ、納刀したリオンが、同じく武器を整えているメリッサ、ハーシェル、ゴードンに向けていった。

「まず最優先するのは行商人の発見だ。竜車の中でも言った通り、彼らは比較的安全な洞窟にいる可能性が高い。よって、まずは洞窟に向かうとしよう」

ゴードンは言うと、ランスに火薬による砲撃能力が備わった、ガンランスと呼ばれる武器を背負った。

「この辺りの地形は良く知っているわ。ここから洞窟に向かうには、

三つのルートがあるの。一つは砂漠地帯を進むルート。二つ目は峻険な山が広がる岩場地帯を進むルート。そして三つ目が、ゲネポスの巣窟を突っ切るルート。距離的には、ゲネポスの巣窟を突っ切るルートが一番近いけど、戦闘は避けられないわ。砂漠ルートは最悪、ダイミョウザザミに遭遇するかもね。安全なのは岩場ルートだけど、時間がかかるわ。どうしましょう？」

メリッサは、このカーライル砂漠の地形を説明した。もともとメリッサはカーライル砂漠に程近い村出身である。その知恵が今回役にたっている。

「決まってんだろ！。早く駆けつけなきゃいけないなら、一番近いゲネポスの巣窟を突っ切るルートしかない！！」

「ふふっ、相変わらずだな、リオンは。だがしかし、あえて正面から戦いを挑む、か・・・。面白くなりそうだ。僕はリオンの意見に賛成だよ」

ハーシェルはクスクス笑いながら弓を背負った。

「では、リオンの言う通りにしよう。いざ、正義の名の元に、行商人を救出するぞ！！」

「よっしゃー！！！」

ゴードンに続いてリオンが叫んだ。二人は一目散にベースキャンプの出口へ駆け出した。

「全く、私の意見なんか聴かずに行っちゃった。リオンは分かるけど、ゴードンさんも行くなんて。あの二人、なんか似てるよね？」

「それは僕も同感です。まあ引かれ合う物があるんでしょう。さあ、彼らの後を追いますよ」

ハーシェルは言うと、リオンとゴードンの後を追った。

「はあ。なんでリオンは、こうも変人と意気投合するのかな・・・」

残されたメリッサは愚痴をこぼすと、ハーシェルの後を追った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ベースキャンプを抜けると、待っているのは灼熱砂漠だ。そこから南に進むと、とある洞穴が現れる。灼熱の砂漠に苦しむ人間の中に、苦しみから解放されようと、その洞穴に入る者がいる。

だが安易にこの洞穴に入るなかれ。待つのは殺戮のみ。中にいるのは大量の肉食鳥竜、ゲネポス。ここのゲネポスは数の利、地の利を生かし、侵入者を包囲、殲滅する。ゆえにハンターでさえ、余程のことが無い限りこの道を通らない。

しかし今、この洞穴の入り口の壁に隠れながら覗き込むハンターがいた。

「見渡すだけで二十体はいますね。ドスゲネポスはいないようですが、さすがにゲネポスの巣窟と言われるだけはある」

ハーシェルである。彼は覗き込む片目だけで有力な情報を、後ろに隠れる三人に教えることができた。

「強行突破しかないな。皆、俺に続け！！」

ゴードンは言うと、一気に駆け出し、巣窟に突っ込んだ。その瞬間、ゲネポスの鳴き声が洞穴に広がった。

「ゴードンさん、思い立ったら即行動するのか。凄い人だな！！」

リオンは一言言うと、意を決し、洞穴に侵入した。メリッサ、ハーシェルも後に続いた。

リオンの前方には、走り続けるゴードンと、狙いを定めた一体のゲネポスが先陣を切って突っ込んできていた。

グワアアア！！！

そのゲネポスが高く跳躍し、ゴードンに飛び掛かった。

「ぬうううううん！！！」

ゴードンはゲネポスが跳躍する瞬間に、ガンランスを手にし、勢い

よく前に突き出した。

すると前に行く勢いで、今まであらわになっていた砲が隠れ、変わりにランスが現れた。

ブシャアアアア！！！

ランスはゲネポスの胴体を貫通した。ゴードンはランスを振り払い、一撃で絶命したゲネポスを離した。

グワアアアウ！！！

直後、仲間の死に激昂した二体のゲネポスが、同時にゴードンに飛び掛かった。

ガアアアアアン！！！

ゴードンは、右手に持っていた巨大な黒い盾で二体のゲネポスの攻撃から身を守った。

ゴードンの持つガンランスは、黒いグラビモスの素材が使われる『ブラックガンランス』。その強固な素材で造られた、このガンランスはゲネポスの攻撃にはびくともしない。

「はっ！！！」

ゴードンは左手に持つガンランスのトリガーを引いた。瞬間。

ドオオオオン！！！！

と爆音が鳴った。隠れていた砲が現れ、ここから砲撃が放たれたのだ。砲撃を受けた二体のゲネポスは吹き飛ばされた。やがて地面に激突すると、よろめきながら立ち上がろうとした。

「不意討ちで悪いな！！！」

「はあああ！！！」

そこに現れたのはリオンとメリッサ。二人は洞穴の左右の端を翔け、吹き飛ばされたゲネポスを狙ったのだ。思惑は的中し、二人は同時にゲネポスに攻撃し、一撃で仕留めた。襲われているゴードンは絶対に殺られない、と信頼しての行動だった。

「後始末、ご苦労！」

「ったく。やり方が強引過ぎる、ってんだ！」

「ふっ。正義心溢れる俺は正面突破が大好きなんだ」

「い、意味分かんねえ・・・」

ゴードンの言葉に、リオンは苦笑した。しかしリオンは改めてゴードンの強さを目の当たりにした。

的確な攻撃。瞬間的に行われる状況判断。そしてゲネポス二体の攻撃を食い止める、圧倒的な力。さすが上位クラスのハンターである。

グウウウウ・・・

三人の連携を見て、周りに立つ十数体のゲネポスは様子見とばかり

に、一斉に三人を取り囲んだ。だがそのせいで、一人の男の存在を忘れてしまっていた。

「目を閉じてください！！」

ゲネポスが気づいた時には、ある男は包囲網の中に侵入し、上空に何かを投げていた。

「げっ！！！！」

リオンはその男は誰かを、そして投げた物は何かを直感的に理解した。それはメリッサ、ゴードンも同じようで、直ぐに両目を力を込めて閉じた。

バアアアアアアアアアアン！！！

辺りに閃光が迸(ほとばし)った。しばらくして光がおさまると、リオンはゆっくりと、目を開いた。

見渡す限り、全てのゲネポスが悶えていた。おそらく閃光を直視したのだろう。

「よし！。華麗に決まったね」

包囲網に侵入したのはハーシェルだった。そして閃光を放つ玉、閃光玉を投げたのも彼だ。

「こいつらとやり合う時間がもったいない。ここは巣窟を抜け、洞窟に入るぞ！！」

ゴードンは言うと、悶えるゲネポスには目もくれず、洞窟を目指した。残された三人も、ゴードンの後を追った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

リオンたちは洞窟の中をひたすら走った。まもなく閃光玉の効果がきれる頃だ。狡猾なゲネポスは、直ぐ様捜索を開始するだろう。

「一つ聞きたいんだが、ハーシェル。てめえ、何で俺たちの真上に向けて閃光玉を投げた！？」

走りながら、リオンはハーシェルに怒りをぶつけた。

「あの時ゲネポスの視線は君たち三人に向いていた。なら君たちの近くで閃光玉を炸裂させれば効果は抜群。それに、君たちなら直ぐに目を閉じると確信していたよ」

「今回はたまたま上手くいったが・・・。本当にてめえは色んな意味で危ないやつだな」

「それは一体、どういうことかな？」

まさに一触即発。二人は走りながらにらみ合った。

「ちょっと！。そんなことしてる暇があったら、周りに目を向けなさい。一刻も早く行商人を探さないといけないんだから！」

「左様。ゲネポスが行商人を見つける前に、なんとしても先に見つけないといけないんだ」

「「はーい・・・」」

メリッサとゴードンの喝を受け、リオンとハーシェルは揃って言った。

こうしていりくんだ洞窟内で捜索を続けること、数十分。

「おーい！！。行商人さーーーん！！。いたら返事してくれーー！！！」

リオンが叫んだ。その声は洞窟内に良く響く。だが返事は無い。

「不味いわね。もしかしたら、もう・・・」

メリッサが呟いた。重苦しい空気が四人にのし掛かる。だがそれから数分後、状況は一変する。狭い洞窟内を進む四人が左に曲がる道を見つけ、その道を進んだ、その時。

「んっ？。あ、あれは！！！」

先頭を走るゴードンが叫んだ。彼の前方には、今までの狭い道とはうって変わって、非常に開けた洞窟になっていた。おそらくここが洞窟の中枢部だろう。そしてこの開けた所の真ん中に座る人間がいた。

「もしかして、行商人さん！？」

メリッサも確認し、叫んだ。その声に気づいたのか、前方にいる人間がこちらを向き、手を振った。四人は急いで駆け寄った。

「おおっ、救出隊か！。待っておったぞ！！」

どうやら救助を待っていた行商人のようだ。この行商人の部隊は合計四人で、全員３０代前半の男性と思われる。

「無事だったか。俺たちが来たから、もう大丈夫だ。これから俺たちが、正義に誓って、君たちを護ろう」

「正義、ってまさかあんた、『日輪の正義』のメンバー！？。さすが、ドンドルマの守護神は違うね～！！。ここまで運ぶはずだった食糧を食ってまで生き延びたかいがあったよ」

駆け寄ったゴードンと行商人のうちのリーダーと思われる一人の男が言った。

「しっかし、あんたらもついてなかったな。流れのハンターに逃げられるなんてな」

遅れて駆け付けたリオンが言った。行商人はそれを聞くと、全員溜め息を吐いた。

「ああ、全くだ。おかげでこっちは大損害だ。ダイミョウザザミに襲われて、タウト村に届ける物資がほとんど無くなっちまったよ」

「えっ、あなたたち、タウト村に行くの？。私、故郷がタウト村なのよ」

メリッサが驚いた様子で言った。するとリオンをはじめ、皆一斉にメリッサに視線を向けた。

「ええっ！。君、タウト村出身なのか！？。じ、じゃあ、タウト村に行く近道を知っていないかい！？」

「え、ええ・・・。っていうか、ここに辿り着くまでにゲネポスの巣窟を通ってきたから、やつらはこの砂漠のあらゆるところを捜索してると思うわ。もうタウト村に行くルートは、南に広がる砂漠地帯を突っ切る道しかない」

「砂漠地帯にはダイミョウザザミがいる可能性が高い。正面突破は美しいが、リスクが大きすぎる。僕は迂回してでも安全なルートを進む方がいいと思う」

メリッサの提案に、ハーシェルが反論した。今回何より重要なのは行商人の安全を確保することだ。わざわざダイミョウザザミに遭遇する確率が高いルートを進む必要はない。

「馬鹿言ってんじゃねえよ、ハーシェル。迂回するったって、もし大量のゲネポスにあったら、それこそ御陀仏だ。やっぱり砂漠地帯を突っ切ろうぜ」

「うーん・・・。悔しいが君の言うことも一理ある。ダイミョウザザミだけなら集中して対応できるし」

「そうよ。もうこの道しか無いわ」

三人は意見をまとめ、結局一番近いルートを通ることに決めた。

「大丈夫だ。行商人の皆さんは、俺が必ず護る。さあ皆さん、行きましょう！！」

ゴードンは行商人に向かって言った。行商人も覚悟を決めたのか、全員大きく頷いた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

リオン、メリッサ、ハーシェル、ゴードン、そして行商人の四人はしばらくして、南へと進んだ。その際、メリッサはこの辺りの地形は知っているらしく、先頭に立った。

その時行商人の話を聞くことができた。当初、竜車を使って物資を

運んでいたらしい。が、ダイミョウザザミの襲撃で竜車が破壊されたらしい。そして避難する時、流れのハンターが僅かの間だがダイミョウザザミと戦闘してくれたおかげでほとんどの物資を洞窟内に持って行くことが出来た。だから今日まで生き延びることができたようだ。

リオンたちは行商人の疲労を心配して、物資を八等分に袋詰めし、それぞれ一人一袋を担いで移動していた。そして進むこと約十分。

「見えたわ。洞窟の出口よ」

メリッサたちの前方に、光が差し込み明るくなった場所が現れた。

「ここから先は何が起こるかわからないわ。気を引き締めて行かないと」

メリッサが言うと、他の七人は小さく呟いた。そして八人は光の中に飛び込んでいった。

何処までも広がる砂漠。容赦なく降り注ぐ灼熱の太陽。文字通り灼熱地獄と化したフィールドが八人を待っていた。

八人は砂に足をとられながらも、物資を背負って歩いた。

「ちょっと待って。おかしいわ」

砂漠地帯を歩くこと数分、突然メリッサが足を止めた。

「何がおかしいんだ？」

それを見たリオンがメリッサに向かって言った。

「いつもならこの辺りには、ガレオスがいるはずなの。だけど今は、その泳ぐことで生まれる砂塵すら見かけないわ」

「そう言われると・・・。確かに、何もいないな」

メリッサとリオンの言う通り、この砂漠にはモンスターが確認できない。それは八人に安心感ではなく不安感を与えた。

「しかし今は、とにかく進むしかないですよ、皆さん」

「ええ。そうね、ハーシェル。タウト村はずっと真っ直ぐ進むと着くわ」

モンスターがいないことは不気味だが、安全であることに変わりはない。八人は再び歩む始めた。

こうして歩くこと約十分。依然としてモンスターには出会わなかった。

「はあ、はあ・・・。やっぱり荷物運びながらの砂漠はキツいな・・・」

「ええ、本当ね・・・。私はランスも背負ってるから、重いのには慣れてるけど、正直しんどい・・・」

「メリッサさんは軽い荷物で良いじゃないですか。僕なんか力があまりないのに、こんな重い物資を背負っているのですよ」

リオン、メリッサ、ハーシェルは揃って愚痴をこぼした。三人とも大量の汗を流し、はあはあと息を吐いた。

「やっぱり俺たちが持ちますよ、ハンターさん。こういうのは俺たちの仕事なんですから」

そんな三人を心配して、行商人の一人が言った。

「いや・・・。行商人の皆さんだって、長い避難生活と急激な環境の変化で、本当なら身体そのものが危ないかもしれないんです。僕たちなら大丈夫です」

「俺たちを気遣ってくれるのか。本当にありがとう。逃げた流れのハンターなんか、そんな言葉、一言を言わなかったよ。あいつらめ、無事に終えたらハンターズギルドに通報して、指名手配にでもしてやる！」

「ははは・・・。流れのハンター、御愁傷様ですね」

行商人のリーダーとハーシェルが話し合い、共に笑い声をあげた。その時。

「止まれ！！！！」

突如ゴードンが叫んだ。

「どうしたんですか？」

メリッサがゴードンに向かって言った。ゴードンは物資を下ろし、左耳を地面につけた。

「んん？」

リオンもゴードンの真似をした。

同時に地面につけた両手が、砂が振動しているのを知らせた。しかも徐々に振動が激しくなっている。そして耳から聞こえる、何かがこちらに迫る音。

（これって、まさか・・・）

リオンは直感で危険を察知した。それはゴードンも同じだった。

「散らばれーーーー！！！！」

ゴードンが叫んだ。その声を聞き、皆一斉に所構わず走った。それから僅か数秒後。

ズドオオオオォォォォン！！！！

リオンが元いた場所から一本の角が突き出した。リオンが運んでいた物資に角が直撃し、物資が宙に舞った。

「あ、危ねー」

リオンは思わず呟いた。あと数秒動くのを遅れたら、自分はあの角に貫かれただろう。リオンは思った。

グギュウウウウ・・・

現れたのは、一本の角が最大の武器とする、一角竜と呼ばれる角竜種、モノブロスの頭部。これをヤドとし、全身を赤い甲殻に覆われた、巨大な蟹と連想させる物体が遅れて出てきた。

「ついに出たな、ダイミョウザザミ！！」

ゴードンが叫んだ。

背中を守る一角竜の頭部。まるで盾を思わせる鋏。巨体を支える四本の脚。その付け根の上に、厳つい顔。これが、『盾蟹』と呼ばれる甲殻種、ダイミョウザザミである。

「リオン、メリッサ、ハーシェルはダイミョウザザミと抗戦！。俺は行商人を村まで護衛する！。頼んだぞ！！」

「はい！！。コイツは任せてください！！」

ゴードンはリオンの返答を聴くと、行商人の近くに駆け寄った。行商人の四人は、物資を再び背負うと、残ったメリッサ、ハーシェル、そしてゴードンが背負っていた物資も持ち上げ、運び出した。この危機的状況でも彼らは少しでも多くの物資を運ぶことを選んだ。ゴードンは文句一つ言わず、その後ろについていった。

グギュウウウアア

逃げる五人を見たダイミョウザザミは、逃がさないとばかりにゆっくりと前方を歩き出し、後を追い始めた。

ドドドドン！！！

ダイミョウザザミの身体から何かが一斉に爆発した。ダイミョウザザミは後方を見た。

「残念だけど、君の相手は僕たちだ」

爆発の原因はハーシェルだった。彼の持つ弓『鳥弊弓＝』から放つ弓矢には火属性がつき、獲物に当たると爆発するのだ。

「いい？。なるべくこちらに目を向けさせ続けるのよ」

メリッサはランス『ロングタスク』を構えた。

「わかったぜ、メリッサ！。さあ覚悟しろ、ダイミョウザザミ！！」

リオンが太刀『鉄刀【神楽】』を抜刀し、構えた。三人はダイミョウザザミを取り囲んだ。

グギュウウウアア！

ダイミョウザザミは標的を三人に変更した、と告げるように鳴いた。今、決戦の火蓋が切って落とされようとしていた。

第十一話【Ｒｅｓｃｕｅ　ｂａｔｔｌｅ】（後書き）

サブタイトルの意味は【救出戦】です。すいません。だいぶ更新が遅れました。大学から出される宿題に悪戦苦闘し、休日もいろんな所に出掛けなければいけなかったのです。あと、ちょっと今後の展開について行き詰まってしまいました。今さらながらメインタイトルにつけてる、～惨劇の再来～、とはかけ離れてるのに気付きました。まあ何時になるかは分かりませんが、ちゃんとこうなるので。今はメインタイトルは無視して下さい。そして何のへんてつも無い普通のモンハン小説と思って下さい。

第十二話【Ａｃｃｉｄｅｎｔ】

カーライル砂漠の南に広がる砂漠地帯。ここには今、臨戦体勢になったリオン、メリッサ、ハーシェルの三人が、赤い甲殻に覆われた、『盾蟹』と呼ばれる甲殻種、ダイミョウザザミを取り囲んでいた。

「さあて・・・。まずは様子を見るか」

リオンは少し間合いを取った。リオン自身、ダイミョウザザミと戦うのは初めてで、無闇に突っ込むのは危険だと理解していた。相手の行動と攻撃方法を探ることは戦闘において重要なことの一つなのだ。

グギュウウウアア！

そんなリオンを見たダイミョウザザミは、そっちが来ないならこっちから仕掛けるとばかりに、四本の巨大な脚を器用に動かし、リオンに向け前進し始めた。

（動きは遅い！！）

リオンが思った通り、ダイミョウザザミの行動はゆったりとしていた。ダイミョウザザミは防御に特化し、その代償として歩行速度を犠牲にした生物である。

ダイミョウザザミはリオンに近づくと、両鋏を前に振った。しかしリオンは即座に離れたため、鋏は空を切った。

「なんだ？今のが攻撃か？」

あまりにもゆっくりとした攻撃にリオンは苦笑した。

「はあああぁぁぁ！！！」

リオンから見て、ダイミョウザザミの左方向から人の声が聞こえた。声の主はメリッサであった。メリッサはランスを手に取ると同時に突き出そうとした。

グギャアアウ

だがダイミョウザザミは横からの攻撃を察知すると瞬時に鋏を振り上げ、メリッサに向けて振り下ろした。

「くっ！！」

先手をうたれ、メリッサはたまらず盾を構え、ガードした。

ガキーーーン！！

鋏と盾の激突音が響いた。メリッサはダイミョウザザミの攻撃が終わると直ぐに離れた。

「動きが鈍いわりに隙がねえな。それに死角もなさそうだ」

「ええ。甲殻種とはそういうものよ。狙うとしたらダイミョウザザミの後ろ脚くらいしかないわ」

メリッサはリオンにアドバイスした。一方、ダイミョウザザミは標的をリオンに変えたらしく、再びリオン目掛け歩き出した。

「おいおい・・・。僕を忘れないでくれよぉ」

声が聞こえた瞬間、ダイミョウザザミの右側から立て続けに爆発が起きた。たまらずダイミョウザザミは怯んだ。

「全く・・・。僕、なんかモンスターに無視されてる気がするんだが・・・」

「まあまあ。良いことじゃないか。その分狙われずに済むし。気にすんな」

リオンがダイミョウザザミに向け弓矢を放ったハーシェルをなだめた。

グギュウウウアア！！！

一方、ダイミョウザザミは突然鳴き声を上げると、両鋏と脚を使い、地面を掘り、瞬く間に姿を砂の中に消えた。

「まずい！。みんな走り回るんだ！！」

ハーシェルはダイミョウザザミの行動を見るや、すぐに走りながら叫んだ。その声に反応して他の二人も走った。その数秒後。

ズドオオオォォォォン！！

走るメリッサの直ぐ後ろに一本の巨大な角が突きだした。

「ゲホッ、ゲホッ・・・」

かろうじて攻撃を避けたが、その後メリッサの体に、巻き上げられた細かい砂が降り注いだ。メリッサは砂を吸い込んでしまったらしく、むせてしまった。

ダイミョウザザミは地上に上がると、立ち止まったメリッサに向かって歩き出した。

「させないッ！！！」

ハーシェルは急いで弓矢を手にとり、放った。しかしダイミョウザザミと随分離れていたため、弓矢は勢いを無くし、当たったが怯むことはなかった。

「くッ！！」

メリッサは盾を構えた。ダイミョウザザミは盾目掛け両鋏を前に突きだした。メリッサは体勢を僅かに崩したが、しっかりとガードした。

「うおおおッ！！！」

ダイミョウザザミの攻撃直後、リオンは駆けつけ、右脚を切りつけた。僅かに甲殻種特有の紫色の血液が噴き出したが、ダイミョウザザミは何事もなかったかのような素振りをし、今度は逆にリオン目掛け右鋏を振り下ろした。

「ごはッ！！！」

攻撃後のリオンは避けることが出来ず、身の丈ほどはある右鋏の、

パンチに似た攻撃をもろにくらい、吹き飛ばされた。

「リオン、大丈夫！？」

ダイミョウザザミと距離をとったメリッサは倒れたリオンに呼び掛けた。

「あ、ああ・・・。ったく、なんて衝撃だ。そんなに振りかぶらないで、この威力かよ」

「ダイミョウザザミとの戦闘では、一撃離脱が有効よ。攻撃したら直ぐに離れるの。動きは遅いから、焦らないでいきましょ」

リオンはメリッサの話を聞くと立ち上がり、回復薬を飲んだ。その間ダイミョウザザミは横歩きでリオンに近づき始めた。

ドドドドオオオン！！

ダイミョウザザミのヤドから、次々と爆発が起きた。一角竜の頭殻には五本の弓矢が突き刺さっていた。ダイミョウザザミは何事かと振り返った。

「顔が丸出しだよ」

ハーシェルはその瞬間を狙っていた。既に引き絞っていた弓から、五本の弓矢を放った。

ドオオオオン！！！

全ての弓矢がダイミョウザザミの顔面に直撃し、爆発した。不意を

つかれ、ダイミョウザザミは怯んだ。

「今だ！！！」

リオンが気づいた時にはメリッサも同様のことを思ったのだろう。
二人は同時にダイミョウザザミに向けて駆け出した。そして。

「うらあああああッ！！！」

「はあああああッ！！！」

リオンがダイミョウザザミの右脚を、メリッサが左脚に攻撃を炸裂させた。ハーシェルも引き続きダイミョウザザミの顔面に弓矢を放ち続けていた。

ダイミョウザザミは苦しみに小さな鳴き声を上げた。

「まだまだ！！！気刃斬り！！！」

リオンは太刀特有の、対象物を斬る程に溜まる錬気ゲージを消費し、赤いオーラを纏った斬撃を右脚にあたえた。

その時だった。

グギャアア！！！

突如、ダイミョウザザミから、今までにない声が発せられた。

（なんだ、今の声は・・・？。まるで、何かが切れたような・・・）

攻撃を終えたリオンがそう思った時、突然視界にダイミョウザザミの顔面が現れた。

その両目は怒りに満ちており、口からは泡が溢れていた。

「リオン！！」

「まさか、こいつ！？」

ハーシェルの声を聞き、リオンは迫り来る危機に気づいた。

ギュオオオオ！！

その瞬間、ダイミョウザザミが口を大きく膨らました。数秒後、両鋏を広げ、何かを吐き出した。

（速いッ！！！！）

リオンがダイミョウザザミの行動に気づいた時にはもう手遅れだった。

ブシャアアアア！！

ダイミョウザザミが吐き出したのは、大量の水だった。リオンは何もすることが出来なかった。吐き出した水に直撃したリオンの体は、まるで激流に飲み込まれるが如く吹き飛んだ。

「リオン！！。大丈夫！？」

数十メートル吹き飛ばされたリオンを見たメリッサが叫んだ。

「ああッぐッ！！」

リオンは全身に走る激痛に悶えた。

いくら大量とはいえ、吐き出されたのは水である。ではなぜリオンは、こんなにも苦しんでいるのか？

それは速度に関係する。いくら柔らかいものでも、速度が急激に上昇すれば硬度も衝撃力も高まるのだ。一説によると、ダイミョウザザミから吐き出した水は、瞬間的に時速百キロメートルを超えるという。先程リオンは至近距離でこの水のブレスを喰らった。リオンは、鋼鉄の固まりと化した水に直撃したと考えていい。

「くッ！。よくもリオンを！！」

メリッサは怒りにかられ、ダイミョウザザミの脚を狙いランスで突き攻撃をした。

するとダイミョウザザミは攻撃を受けると、突然天高く飛び跳ねた。メリッサが上空を見上げた時には、ダイミョウザザミの身体は十数メートルも上空にいた。

数秒後、上昇していたダイミョウザザミの身体は空中で一瞬停止し、両鋏を下に向けた瞬間、降下を始めた。

「うそッ！！！」

降下のスピードはダイミョウザザミの巨体ゆえに速く、メリッサは回避不可能とみると、とっさにガードした。

ズドオオオォォォォォン！！

ダイミョウザザミの身体は地面に激突した。メリッサはあまりの衝撃に弾き飛ばされた。メリッサは直ぐに距離をとると、ランスと盾を砂の上に置いた。

「くうう・・・」

メリッサの両手は、ダイミョウザザミの攻撃によって力が入らなくなっていた。

「これはまずいな・・・」

苦しむリオンとメリッサを見ていたハーシェルは呟いた。現在ハーシェルはダイミョウザザミの後方に立っていた。

グギャアアアア！！！

ダイミョウザザミが突然鳴いた。すると突然、ダイミョウザザミは後ろにダッシュし始めた。

「なにッ！？」

ダイミョウザザミの狙いはハーシェルだった。ハーシェルは急いで走り出した。そしてダイミョウザザミのヤドである一角竜の角がハーシェルに当たる瞬間ダイミョウザザミは、まるで後ろにも目があるかのように、ハーシェルを狙って角を突きだした。

「くうッ！！」

ハーシェルは身をよじり、角の直撃を避けた。が、一角竜の頭部まで避けることは出来なかった。ハーシェルの体は、ダイミョウザザミの攻撃後に発生した風圧によって数メートル吹き飛ばされた。

ズサアアァァ！！

ハーシェルの身体は砂の上を転がり、やがて止まった。その後、なぜかハーシェルはピクリとも動かなくなった。

「ハーシェル？。もしかして、さっきの攻撃で気を失ったの！？」

ハーシェルの異変に、メリッサが気づいた。一方ダイミョウザザミは振り返り、ハーシェルを見ると仕留めたと思ったのか、今度はうずくまるメリッサを狙い、歩き出した。

「くう・・・」

メリッサは動かなかった。今だに痺れがとれず、腕に力が入らないのだ。武器を置いて逃げることは出来るが、それは同時に、ハンターでは無くなり、誇りを捨てることになる。それにメリッサは、自分が逃げれば残されたリオンとハーシェルは必ず殺されてしまうと分かっていたため、動かなかったのだ。

ドスッ、ドスッ・・・

砂漠を歩くダイミョウザザミの不気味に響いた。メリッサは覚悟を決めた。

「待てよ・・・」

突如、声が聞こえた。メリッサは驚き、周囲を見渡した。

「り、リオン？」

メリッサの視界にとらえたのは、片膝をつきながらも、しっかりと太刀を握りしめたリオンだった。

「はあっ、はあっ、はあっ・・・。俺は未だ、戦える・・・。俺が、相手だ」

リオンの身体を動かすのは、仲間を守るという信念だけだった。よろめきながら立ち上がると、ゆっくりと、ふらつきながらダイミョウザザミに向かって歩いた。

（リオン、そんな体で・・・。無茶よ。せめて回復薬を飲んで・・・）

メリッサは心の中で祈った。だがそんなメリッサの思いは、今のリオンには届くはずがなかった。

グギュウウアア！

復活したリオンに驚いたのか、ダイミョウザザミは自我を取り戻し、動きがゆっくりになった。

だが絶対不利という状況は変わらない。ダイミョウザザミは再度とどめを指すべく、右鋏を振り上げ、リオンに向かって横歩きで迫っ

た。

「護るんだ・・・。俺が皆を、護る・・・」

リオンは自分に言い聞かせるように言った。みるみる内にダイミョウザザミが近づいて来る。そして攻撃範囲に入った。リオンは直ぐに脚を狙い、腕を高く上げ、太刀を振り下ろした。

「ぐうッ！！！」

だが、その攻撃が当たることはなかった。ダイミョウザザミの鋏攻撃が先にリオンの体をとらえたのだ。リオンは全身に走る衝撃に抗しきれず、太刀を手放してしまい、うつ伏せに倒れた。

グギャアア！！！

ダイミョウザザミは倒れたリオンを見ると、容赦無い攻撃を仕掛けた。両鋏を高く上げると、リオンの体を挟み撃ちにするように、踏み込みながら両鋏でリオンを挟んだ。

「ごはッ！！！！」

体の両側から来る衝撃と痛みに、リオンはのけ反り、口から血を吐いた。

「リオンッ！！！」

その様子を見たメリッサは悲鳴にも似た言葉を放った。ダイミョウザザミが鋏を離すと、リオンは完全に倒れ、動かなくなった。

グギュウウ・・・

とどめを指したと思ったダイミョウザザミは、再度体をメリッサに向け、歩き出した。

「くうッ！」

メリッサはランスと盾を手にとり、持ち上げようとした。だが今だに力が入らず、数十センチ上げるのがやっとだった。

「来なさい！！。私が相手になるわ！！！」

メリッサは、リオンの気迫に戦意を取り戻し、ダイミョウザザミに向けて叫んだ。迫り来る恐怖を押し殺し、メリッサは堂々と立ち続けた・・・。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

（だめだ・・・メリッサ・・・）

メリッサが武器を手にとったのを見たリオンは、薄れゆく意識のなか、思った。

視界も消えつつある満身創痍の体だが、不思議と今鮮明に見える光景があった。

それは、ゲリョスとの戦いの時、恐怖する自分を突き飛ばし、攻撃をもろに喰らい、大怪我を負ったメリッサ。この一連の光景がフラッシュバックしてきた。

（もうあんな思いは、させたくない・・・。俺が護るから・・・。俺が・・・）

リオンは動かぬ体を必死になって動かそうとした。だが体はそれを断固拒否する。その間に意識が遠退いていく。

（俺が・・・皆を・・・護るんだ・・・）

言葉に出来なかった思いを心の中で思った。直後、リオンの視界は真っ黒になり、意識を失った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

グギャアア！！

ダイミョウザザミとメリッサの距離が縮まる。その間メリッサは一歩も動かず、ダイミョウザザミを待ち構えていた。

そして、両者が攻撃範囲に入った。ダイミョウザザミが両鋏を高く上げると、メリッサは盾を前に突きだし、ガードする体制をとった。

ブシャアアアア！！！！

だが、ここで予想外のことが起きた。突如響いた、血が勢いよく噴き出す音。

「・・・えッ？」

メリッサは、目が点になった。ダイミョウザザミは自分の脚を見た。右脚から噴き出す、青みを帯びた血液。ダイミョウザザミがそれに気づいた瞬間、体勢を崩し、左に転倒した。すると、ダイミョウザザミの後ろから、赤い防具を装備した男が現れた。

「うそ・・・リオン？」

赤い防具と、手に握る太刀。この二つを持つ男は、ここには一人しかいない。ダイミョウザザミに攻撃を仕掛けたのは、リオンに間違いなかった。

（なんで？。あの時、リオンは確かに倒れたのに・・・）

メリッサが疑問に思った。その時、リオンが静かに顔を上げ、両目がメリッサの顔をとらえた。二人の目が合わさった。瞬間。

「ううッ！！！」

メリッサに、強烈な殺気と、背筋が凍るように冷たい眼（まなこ）から放たれる恐怖が襲いかかった。無表情ながら、普段のリオンからは考えられないような殺気に、メリッサは支配され、ランスと盾を手放し、両膝をついた。

「ヴゥアアアアアアアアアアアアアッ！！！！！」

突如、リオンは雄叫びを上げた。だがその声は、この世の物とは考えられない程、絶望に満ちていた。

（うそよ・・・。これが本当に、リオンなの！？）

メリッサが、目の前に立つ、異形とも言えるリオンに驚愕した。それはダイミョウザザミも同じようであった。

ダイミョウザザミは、ようやく立ち上がると、危険を察知したのか、口に水を含むと、直ぐにリオンに向かって勢いよく吐き出した。

だがリオンは、瞬間移動と思うほど、一瞬の内にダイミョウザザミの側面に移動した。

【マモル！！！】

リオンの口から、今まで聞いたことのない、図太い声が放たれた。
リオンは言うと同時に、脚を狙い、太刀を横に薙ぎ払った。

グギャアアアア！！

大量の血が噴き出し、ダイミョウザザミが悲鳴を上げた。

（一体・・・何が、どうなっているの？）

形勢は一気に逆転したが、メリッサは困惑していた。今のリオンは、まるで別の何かが乗り移ったかのようだ。

ダイミョウザザミは一瞬怯んだが、直ぐに立ち直り、リオンに両鋏で挟撃した。

しかし今のリオンには、ダイミョウザザミの攻撃は手にとるように分かっていた。一歩後ろに下がると、僅か数十センチ前をダイミョウザザミの両鋏が通過した。リオンは右鋏を狙い、太刀を勢いよく横に薙ぎ払った。

バキィィィィン！！！！！

これが今のリオンの力なのか。今の一撃で、鋏を覆う甲殻が吹き飛んだ。

グギャアアァァ！！

ダイミョウザザミは苦しみに悶えた。一方、リオンの持つ太刀は、先ほどの一撃で錬気ゲージがたまったのか、赤いオーラが纏っていた。リオンは太刀を両手に持ち、天高く上げた。

【マモル！！】

リオンはダイミョウザザミの顔面に、太刀を振り下ろした。大量の血液が噴き出し、ダイミョウザザミは両鋏を動かし、顔を覆った。

【マモル！！マモル！！マモル！！！！マモル！！！！！！！】

リオンは叫びながら、無防備になった脚を狙い、怒涛の連続斬りを放った。そのあまりの力強さに太刀が折れてしまう危険もあったが、もはや邪気とも思える、刀身に纏う赤いオーラに守られているのか、不思議と折れることはなかった。

グギュウウウゥゥ・・・

あまりの攻撃の速さに、ダイミョウザザミは慌てて後退し、もはや敵わないと思ったのか、おもむろに両鋏で地面を掘り、あっという間に全身を砂漠の中に隠した。

メリッサは砂の中から攻撃すると思ったが、ダイミョウザザミが移動する時に発生する地響きが、東方向に絶え間なく起こり、再び現れることはなかった。

「お、終わった・・・」

戦いの終焉に、メリッサは安堵した。するとリオンは太刀を手放し、天を見上げた。

「リオン？」

メリッサが恐る恐る尋ねた。その時、今まで荒々しかった空気が一変し、穏やかになり、リオンが放つ殺気も消えた。

するとリオンの体が、ゆっくりと、傾いていき、

ドサッ！！

と音をたて、砂漠の上に、うつ伏せに倒れた。

「リオン！！」

メリッサは一心不乱にリオンの元に駆け寄った。

「リオン！？大丈夫！？」

メリッサはリオンの体を起こし、抱えた。メリッサは体を揺するが、何一つ反応がなかった。メリッサはリオンを動かそうとするが、力が思うように入らない。

「どうしたら・・・。あっ、そうだ！！」

メリッサはリオンから離れ、倒れているもう一人の男のもとに向かった。

「起きて、ハーシェル！！」

メリッサはハーシェルの体を揺すった。

「ううッ・・・。あ、あれ？メリッサさん？」

ハーシェルは直ぐに目を開けた。メリッサはホッと息を吐いた。

「痛たッ、頭打ったか。あれ、ダイミョウザザミは？」

「リオンが撃退したわ。でも気絶しちゃってる。急いでタウト村に運ぶわよ。手伝って」

「状況がよく分からないけど・・・。とりあえず、急ぎましょうか」

メリッサとハーシェルは立ち上がり、リオンの元に駆け寄った。ハーシェルはリオンの体を背負い、メリッサは自分とリオンの太刀、ハーシェルの弓を持ち、砂漠の中を歩き出した。

（リオン・・・。あなたの身に、一体何が起きたの？）

メリッサはタウト村に向かう道中、リオンに起きた異変に困惑していた。今やメリッサは、リオンに疑念の目を向けていた。

第十二話【Ａｃｃｉｄｅｎｔ】（後書き）

サブタイトルの意味は【異変】です。今回モンスターハンターとは、かけ離れてしまいました。まあ僕の前作を見てくれた人は分かっていると思いますが、僕の書く小説はこんな感じです。さて、またも更新が遅れてしまい、申し訳ございません。ちょっと内容に行き詰まったのもありますが、大学の勉強とバイトで忙しい日が続いてしまいました。なんとかしたいのですが、近い内に期末テストがあるので、なんともならないのかなあ・・・。

第十三話【Ｄｉｓｔｕｒｂａｎｃｅ】

（何も見えない・・・）

リオンが気づいた時には、自分の意識は無明の闇に落ちていた。瞼は開かず、体も何一つ言うことを拒む。

バチバチッ、バチバチッ・・・

突如、リオンの耳は、何かが燃え、木が爆ぜるような音を捉えた。しかし熱は伝わってこない。

（また、へんな夢でも、見てるのかな・・・？）

リオンは、このような事に遭遇するのは二度目だった。かつて、サティアー密林でリオレイアに殺されかけた時に、このような夢を見たことをリオンは思いだした。

だが今回は少し違っていた。密林で見た夢では視界は開けていたが、今回は何一つ見えない。その変わり音は鮮明に聞こえる。

「これは・・・まさか！？」

不意に声が聞こえた。男の声のようだ。そして、おそらくだが足音が近づいて来る。

「なんということだ。生存者か・・・」

近くで男の声が聞こえた。それは意味深げな言葉だった。

（生存者?。まさか、俺のことか?）

リオンは驚愕した。その時リオンはあることに気づいた。

（これは、まさか・・・。夢じゃなくて・・・俺の・・・）

「リオ～ン！」

突如女の声が聞こえた。その声の主を、リオンはよく知っていた。

（メリッサ?）

その瞬間、今まで暗闇が支配していた空間に、一筋の光が差し込んだ。それは瞬く間に広がり、まぶしい程に輝いた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「はっ・・・」

今まで重くて開けなかった瞼が軽くなった。それを感じたリオンはゆっくりと目を開けた。最初に捉えたのは茶色の天井と思われる物。リオンは続けて周囲を見渡した。自分の体は、小部屋の中にあるベッドに横たわっていた。

「リオン、大丈夫！？」

「全く・・・心配したよ」

そんなリオンに気づいたのか、メリッサとハーシェルが駆け寄って来た。

「おまえら・・・」

リオンは二人に気づくと、身体を起こした。

「ぐあッ！！！」

刹那、全身に激痛が迸(ほとばし)った。特に腹部に走る痛みが酷く、リオンは両手を腹部に当て、身体を丸めた。

「まだ動かないで。あなたが一番、ダイミョウザザミの攻撃を受けたのだから。しばらくは安静しないと」

「そうか・・・。ダイミョウザザミは、お前らが倒してくれたのか・・・」

リオンの言葉に、メリッサは、何か驚いたような表情を見せた。

「えっ・・・。リオン、あなた何も覚えていないの？」

「何って・・・。おまえらが倒したんじゃないのか？。そうだろう、ハーシェル？」

メリッサが言った言葉に、リオンは動揺し、顔をハーシェルに向けた。

「い、いや・・・。僕はダイミョウザザミの攻撃を受けた時に、気を失って、何も覚えていないんだ」

「そうか。俺もダイミョウザザミの集中攻撃を受けた後の記憶を思い出せないんだ。あの後、何があったんだ？」

リオンが言うと、メリッサが小さくため息を吐いた。そしてリオンを見つめながら言った。

「あのね。リオン、あなた一人でダイミョウザザミを撃退したのよ。でも・・・その時のあなたは、別人のようだったわ」

「えっ、俺が撃退した？。それに、別人って・・・」

「うん。たぶんあなたが気を失った後のことだけど。私にダイミョウザザミが迫ってきた時に、突然あなたがダイミョウザザミに攻撃したの。その時にあなたと目があった。その瞬間、私は強烈な殺気と、全身から湧き出る恐怖に襲われたわ」

「なんだよ、それ・・・」

「それでね。その後、あなたが今まで聞いたことのないような声で叫んだと思ったら、直ぐにダイミョウザザミに集中攻撃を浴びせた

の。そしてしばらくしてダイミョウザザミは逃げたわ」

メリッサが一通り話すと、リオンは黙りこみ、何か考える素振りをした。三人が沈黙し、数分がたった。

「殺気、恐怖。そして怒涛の攻撃・・・。もしかして、『コンセントレイション・モード』か？」

「えっ、何？。コンセントレイション・モード？」

リオンが言った思わぬ言葉に、メリッサは驚いた。

「ああ。俺は、極限まで集中すると、モンスターの動きが手にとるように分かるんだ。その集中する際に言うのが、コンセントレイション・モードなんだ」

「そういえば、僕たちが訓練所で出会って数日後に、そんな能力がある、って君言ってたね」

「ああ。だけど、もしコンセントレイション・モードだとしたら、今回はちょっと違うな。記憶を失うなんてこと、今まで無かったからな」

リオンは頭を抱えた。それと同時に、自らに起きた異変に恐怖が沸き起こった。そんなリオンを見てメリッサとハーシェルは言葉が詰まった。辺りに重い空気が流れた。

ガチャッ

その時、この部屋のドアが開いた。三人は一斉にドアを見た。

「おっ。ようやく目覚めたか、リオン」

そこから現れたのは、灰色の防具を身につけ、クロオビショートという、髪をオールバックした髪型の青年だった。

「ゴードンさん！！」

ハーシェルは言った瞬間に、空気は一変した。

「あっ、そうだ！。行商人たちは無事なのか！？」

リオンはゴードンに言った。今回の最重要課題は行商人を無事に村まで護衛することであり、もし何かあれば最悪、依頼失敗となるかもしれない。リオンはそれを心配した。

「安心しろ。行商人の皆さんは無事だ。何はともあれ、今回の任務は成功したよ」

「そうか、よかった・・・。でもゴードンさん、よく一人であれだけの荷物を運ぶ行商人たちを護衛出来ましたね？」

「ふっ、当然だ。正義に満ちたこの俺に、『護衛失敗』などという文字は無い！。ちなみに『日輪の正義』にはこんな暗黙の了解がある。『か弱き人民を護れない者はブルファンゴ以下だ』、てな」

「な、なんだそりゃ・・・。たしかにブルファンゴは突進しか能がないけど」

ゴードンの発言を聞き、リオンは苦笑したが、ふと辺りを見渡すと

メリッサ、ハーシェルも顔がひきつっていた。

「ここに来たのは、お前たちに伝えることがあったからだ。行商人の皆さんは現在、ダイミョウザザミの襲撃によって受けた損失を取り戻すべく商売で忙しいらしく、向こうから会うことは出来ないらしい。あと、この救援依頼の報奨金は後日、ドンドルマの集会所に送るそうだ」

「そうですか。行商人の皆さんには私たちから会いに行きます」

ゴードンの報告を聞き、メリッサが頷きながら返答した。するとリオン、ハーシェルも小さく頷いた。

「そういえば、お前たちは何時ドンドルマに帰還するんだ?。俺は明日には帰るつもりだが」

ゴードンが尋ねた時、リオンは少し悩んだ。本当なら直ぐにでも帰還したいが、自分に負った傷が深く、移動すると激痛を伴う可能性があることを気にしていたのだ。

「ええっと・・・。傷が癒えたら帰還しようと思います」

「リオンの言う通りですね。その時に僕たちも帰るとします。いいですよね、メリッサさん?」

ハーシェルがメリッサに聞いた。だがメリッサはしばらくの間、うつむいたまま、言葉を発しなかった。

「あの、メリッサさん?」

「え?。あ、ええっ、そうしましょ」

「何だ、どうしたんだ、メリッサ?」

心配になったリオンはメリッサに尋ねた。

「ごめんなさい。ちょっと考えごとをしてたわ。さ、さあ、リオンはそこでゆっくり体を休めなさい。私とハーシェルは行商人の皆さんに会いに行くわよ」

メリッサは言い終わると、小走りで部屋から出ていった。ハーシェルは困惑したが、直ぐにメリッサの後を追った。

「何だ?。何かあったのか、メリッサ?」

「ふっ。人の心はその者にしか分からないものだ。気にすることは無い。さて、俺もここから出ていくとするか。では、去らばだ、リオン。お前に、神聖なる正義の加護を」

「言ってる意味が分からないんですけど・・・」

リオンの言葉を聞いたか聞かずか、ゴードンは薄気味悪い笑い声をあげながら部屋から出ていった。一人残されたリオンはゆっくりと寝転んだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

それから三日後・・・。

「祝！。この俺、リオン・ウィルシャー、完全復活！！」

毎日寝込んでいた部屋から飛び出し、久しぶりの外の日差しを浴びながら、リオンが両腕を上げ、叫んだ。

「毎回思うんだけど・・・。君、傷が治った時に必ず叫ぶよね？。恥ずかしくないの？」

「ああん？。何か言ったか、ハーシェル？」

「いや、何でもないよ。独り言だ・・・」

リオンとハーシェルのやりとりがタウト村の住人たちの注目を集めた。が、直ぐ様何事も無かったかのように二人から視線を反らした。

「さて、傷も癒えたことだし、さっさとドンドルマに帰還するか。なあハーシェル、メリッサ？」

「そうですね。早くジェニファーさんの喜ぶ、あの光り輝く太陽のような美しい笑顔を見たいな～！」

「なんだそれ。おめえ相変わらずキモいな」

「キモい？。この僕が？。君は、やはりデリカシーというものが皆無だね」

そんなリオンとハーシェルのやりとりがしばらく続いた。

「あの、ちょっといい？。大事な話があるの」

しびれを切らしたメリッサが二人の間に入った。

「突然で悪いんだけど・・・。私、しばらくこの村に残ることにしたわ」

「「えっ・・・」」

メリッサの突然の発言に、リオンとハーシェルは揃って驚きの一言をあげた。

「な、何でだよ！。何か理由があるのか！？」

しばらく硬直していたリオンが我にかえり、メリッサに詰め寄った。

「理由はね、村長に聞いたんだけど。ここ二日間の間に、このタウト村の周辺の砂漠に、ダイミョウザザミが異常発生してるらしいの。私は、この村を守るために、ここに残りたいの」

メリッサが理由を語った。その目は嘘偽りなど微塵も感じさせないほど、真っ直ぐ真を見つめていた。

「なんだ、そんな理由かよ。だったら俺たちもここに残るぜ。なあ、ハーシェル？」

「もちろん。メリッサさん、みずくさいですよ。そういうことなら、僕たちもこの村に残りますよ」

リオンとハーシェルは互いに頷いた。一方、メリッサは少しの間、うつむいてしまった。

「ううん。これは村の問題だし、幸いここには結構な数のハンターがいるから、あなたたちがいなくても大丈夫だから。それに・・・私、一人で考えたいことがあるの。だから・・・」

深刻な面持ちで、メリッサは言った。

（考えたいこと、か・・・）

リオンは奥底で呟いた。リオン自身、考えたいことがあったから、メリッサの気持ちが良く分かっていた。

「わかった。俺とハーシェルはドンドルマに戻るわ」

「えっ！？。いいんですか、リオン！？メリッサさんだけ、この村に置いて！」

ハーシェルが信じられないとばかりに、リオンを凝視した。

「しょうがないだろ。当の本人がそう言ってるんだから。だけどな、メリッサ。いつでもドンドルマに来いよな。直ぐにパーティー組むからよ」

「ふふふ、ありがとう、リオン。まさかリオンからそんなキザな言葉が出るとは思わなかったな。じゃあ二人とも、このパーティー、一時解散するわ。じゃあね」

「え、ええ。また会う日まで」

メリッサは言い終わるとゆっくりと歩き始めた。ハーシェルはただ一言別れの言葉を発するしかなかった。

「ったく。なんだよキザな言葉って。こっちは真面目なことを言ったのに・・・」

メリッサが立ち去った後、リオンが愚痴を言った。その言葉に反応し、かっこいいことを言ったリオンを恨めしいと思ったハーシェルが突っかかった。その後、ハーシェルとリオン、二人の口論は数分続いた・・・。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

その後、和睦したリオンとハーシェルはタウト村を歩き回った。

その中で、リオンとハーシェルが揃って思ったことがあった。
それは、先程メリッサが言った通り、ハンターが多いことだ。上級飛竜の素材で造られた武器や防具を装備したハンターが所々で見ることが出来た。村に所属するハンターは街と比べるとどうしても少なくなってしまう。辺境の村ともなるとそこにいるハンターは数える程しかいないことがあるので、タウト村は恵まれている方である。

リオンとメリッサはこの光景を見て、これなら自分たちが残らなくても大丈夫だと確信した。

リオンとハーシェルの、タウト村での一日は、あっという間に過ぎた。タウト村に、夜が訪れた。

「さあて、ドンドルマに帰るとするか」

ドンドルマ行きの竜車が待機する、タウト村のはずれにやって来たリオンが背伸びしながら言った。

「それにしても、メリッサさん、見送りにも来ないなんて・・・。僕たち、嫌われたのかな？」

リオンの後ろで、辺りを見渡していたハーシェルが言った。辺りにはメリッサの姿は無く、ハーシェルは落ち込んだ。

「まっ、しょうがないか。考えごとがあるんだろうな。さあ、さっさと行くぞ」

「はあ・・・仕方ありませんね」

リオンとハーシェルは荷物を背負うと、ゆっくりと竜車に乗り込んだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ドンドルマへの道中。時刻は既に夜中。竜車が動く音だけが響く車内で、横たわり、寝ているハーシェルの側で、リオンは横たわりながら自分の両腕を見つめていた。

（俺だけが持つ力、コンセントレイション・モード・・・。まさか、この力に、異変が起きているのか？）

自分が目覚めた時にメリッサから聞いた、異形の自分、ダイミョウザザミを手玉に取った力。そして失われた記憶。リオンは、自分の中に起きている異変に、震えた。

（会いたい・・・。師匠に・・・。師匠なら、この力について、何か知ってるんじゃないか？だから俺に、コンセントレイション・モードを使うなと言ったのか？早く、師匠に尋ねたい！）

リオンは決意を固めると、両目を閉じ、眠りについた。

第十三話【Ｄｉｓｔｕｒｂａｎｃｅ】（後書き）

サブタイトルの意味は【動揺】です。では、まず一言。更新遅くて本当にすみません！。地獄の期末試験とそのための勉強、そしてアルバイトと、かなり忙しかったのです。言い訳ばかりして申し訳ないです・・・。さて、話は変わりますが、皆さんに報告があります。この小説の作者である金色の鸚鵡が、ついに二十歳になりました！。しかも誕生日が、今年の皆既日食の日ですよ！。我ながら凄いと思いました・・・。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3208f/

モンスターハンター　～The return of tragedy～

2010年10月8日12時24分発行